

Muro oka Yama no ue
室岡・山ノ上遺跡
(2 次 ・ 3 次 調 査)

福岡県八女市室岡所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第92集

2 0 1 2

八 女 市 教 育 委 員 会

Muro oka Yama no ue
室岡・山ノ上遺跡
(2次・3次調査)

福岡県八女市室岡所在遺跡の調査報告書

八女市文化財調査報告書 第92集

2012

八女市教育委員会

序

八女市の西部、筑後市と境を接する室岡台地を中心とした地域には数多くの弥生時代の遺跡が地下に存在していると考えられ、相当数の土器や石器などの破片が地表に姿を現しています。その様相を見ると、まさに『弥生銀座』が地面の下に眠っていると言っても過言でない状況です。

室岡台地における本格的な発掘調査の開始は古く、昭和37年の亀ノ甲遺跡に始まります。亀ノ甲遺跡の調査は遺跡地の土取り作業を発端として始まり、福岡県教育委員会・八女市教育委員会・九州大学考古学教室が主体となって調査が行われました。弥生時代前・後期の環濠集落や甕棺や石棺墓が多数発見され脚光を浴び、この室岡台地に眠る弥生時代の遺跡群が北部九州の、特に福岡県南部地域においてその重要性が非常に高いと認識されるようになった大きなきっかけを作った遺跡でもあります。

しかし、その後も農地の地下げや住宅の建設等があり小規模な発掘調査が幾度か行われ、亀ノ甲遺跡以外にも周辺には大規模な遺跡がほぼ台地全域に広がっている事が確認されました。

近年では国道442号線バイパス建設に伴う大規模な発掘調査や民間開発事業に先立つ調査等により、これまで謎であった環濠集落の規模や形態、古代人の生業の一部が分かるようになり、弥生時代の拠点的な集落であった事がより明確になりました。

今回の報告は、昭和59年と同61年に行われた発掘調査に対し発刊されていた概要報告の内容を補完し、より精度の高い情報を公開する事で地下に埋没している遺跡に対する深いご理解を頂く事を目的としております。この報告書が当該遺跡のみならず、市内に点在する文化遺産を深く理解する一助となり、より文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであれば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました地権者様をはじめとする関係各位、及び、地元町内の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は昭和61年3月の概要報告「室岡山ノ上遺跡」（八女市文化財調査報告書 第12集）の内容を再整理し、より精度の高い情報提供を行うべく八女市教育委員会が発刊する八女市室岡所在の室岡・山ノ上遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となって実施している。
室岡山ノ上遺跡2次調査における現地調査は昭和59年7月23日から同年8月31日まで行い、3次調査は昭和61年1月13日から同年1月25日まで行った。
概要報告は昭和61年度中に終了。本報告に伴う再整理作業は平成23年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した遺構の名称については、通常各遺構にSB（建物跡）やSD（溝等）の略記号を付すが、本遺跡、及び、昭和56年度に実施されている第1次調査においては各遺構ごとに名称を付しそれに通し番号を付する形で個別化を行っており、本報告では無用な混乱を避けるため概要報告時の方法に準じ名称を付すこととした。
- 4 本書に使用した現地測量図については赤崎を中心として参加者で分担して行った。また、現地測量図の浄書については一部を概要報告時のものを使用したが、他は新たに書き起こした。出土遺物については昭和61年作成の実測図に一部加筆した上で、岩戸山歴史資料館において新たに浄書を行った。
- 5 本書に使用した現地写真は赤崎が撮影したものである。出土遺物については岩戸山歴史資料館において新たに大塚が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 7 本書の執筆、及び、編集については大塚が行った。この折、昭和57・61年に刊行されている概要報告を参考とした。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1	調査の経過	1
	A 調査に至る経過	1
	B 調査体制	1
2	遺跡の立地と歴史的環境	3
3	調査の内容	7
	A 発掘調査の概要	7
	B 2次調査	7
	1) 遺構と出土遺物	7
	C 3次調査	26
	1) 遺構と出土遺物	26
4	まとめ	37
	図版 (PLATES)	41

插图目次

第 1 図	室岡・山ノ上遺跡（2・3次調査）周辺遺跡分布図〔1/25,000〕
第 2 図	室岡・山ノ上遺跡（2・3次調査）位置図〔1/5,000〕
第 3 図	室岡・山ノ上遺跡（2・3次調査）遺構配置図〔1/100〕
第 4 図	7号竪穴式住居実測図〔1/40〕
第 5 図	8号竪穴式住居実測図〔1/40〕
第 6 図	9号竪穴式住居実測図〔1/40〕
第 7 図	10号竪穴式住居実測図〔1/40〕
第 8 図	15～（21）号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第 9 図	22・23号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第10 図	24号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第11 図	25・26号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第12 図	27・28・30～32号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第13 図	29号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第14 図	33～38号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第15 図	39号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第16 図	40号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第17 図	41・42号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第18 図	43号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第19 図	44・45号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第20 図	3～9号、11～13号土壇実測図〔1/40〕
第21 図	大濠土層断面実測図〔1/40〕
第22 図	貯蔵穴 出土土器実測図〔1/4〕
第23 図	貯蔵穴 出土土器実測図〔1/4〕
第24 図	貯蔵穴 出土土器実測図〔1/4〕
第25 図	貯蔵穴 出土土器実測図〔1/4〕
第26 図	室岡・山ノ上遺跡2次調査 出土石鏃実測図〔2/3〕
第27 図	室岡・山ノ上遺跡2次調査 出土石器実測図〔1/3〕
第28 図	11号竪穴式住居実測図〔1/60〕
第29 図	12号竪穴式住居実測図〔1/60〕
第30 図	13号竪穴式住居実測図〔1/60〕
第31 図	14号竪穴式住居実測図〔1/60〕
第32 図	46号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第33 図	47～52号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第34 図	53号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第35 図	54号貯蔵穴実測図〔1/40〕
第36 図	V字溝西壁土層断面実測図〔1/40〕

- 第37図 V字溝南壁土層断面実測図 [1/ 40]
第38図 V字溝 出土遺物実測図 [1/ 4]
第39図 V字溝 出土遺物実測図 [1/ 4]
第40図 竪穴式住居、及び、貯蔵穴 出土遺物実測図 [1/ 4]
第41図 貯蔵穴 出土遺物実測図 [1/ 4]

図 版 目 次

- PL 1～PL 2 室岡・山ノ上遺跡2次調査 現地調査状況
PL 3～PL 4 室岡・山ノ上遺跡3次調査 現地調査状況
PL 5～PL 11 室岡・山ノ上遺跡2・3次調査 出土遺物

1 調査の経過

A 調査に至る経過

八女市の西部に位置している室岡台地周辺は、本格的な発掘調査に着手される以前より採取される甕棺などの弥生時代の遺物から、八女市内においても有数の埋蔵文化財包蔵地であると一部研究者の間では注目を受けていた。

昭和37年7月から行われた土取り作業に伴う亀ノ甲遺跡の発掘調査により、台地周辺に大規模な弥生時代の遺跡が展開していることが明確となり、以降、周辺地域の開発行為については以前に増して注意が払われるようになった。

昭和56年になり個人所有地内における土取り作業中に甕棺・石棺が出土。連絡を受けた八女市教育委員会は福岡県教育委員会、及び、地権者と協議を行い昭和56年10月26日から同年11月20日までの間、福岡県教育委員会文化課職員の派遣を受け330㎡の発掘調査を行っている。(室岡山ノ上遺跡1次)

第1次調査の後、周辺地域は畑地開削のため毎年地下げが行われるようになり、徐々に未調査部分にその影響が見られるようになった。このため八女市教育委員会は地権者との協議を行いつつ、文化財の保護措置について福岡県教育委員会に指示を仰いだ。その結果、昭和59年7月23日から同年8月31日までの期間を設け、室岡山ノ上遺跡第2次として440㎡の発掘調査を行い、昭和61年1月13日から同年1月25日まで第3次として350㎡の発掘調査を行う事となった。

B 調査体制

【昭和59年度】(第2次調査)

〔調査主体〕

八女市教育委員会

教育長	坂田 不二夫
社会教育課長	松延 繁太
同 係長	杉山 信行
同 主任	小野 勝輝
同 係員	田中 博文、平田 高義、川口 美文、松尾 弘子、赤崎 敏男(調査担当)

調査補助員 横田 公己、多々良 松男(国学院大学)

調査作業員 加藤 満義、星野 明、大石 満、政次 シメノ、大石 ミツ子、江上 ミサキ
田辺 神奈、壇 花子、橋爪 きりえ、原 律子

【昭和60年度】（第3次調査）

〔調査主体〕

八女市教育委員会

教育長 坂田 不二夫
社会教育課長 末継 清四郎
同 係長 杉山 信行
同 係員 梅野 満、平田 高義、川口 美文、松尾 弘子、赤崎 敏男（調査担当）

調査作業員 星野 明、末継 和久、政次 照明、政次 シメノ、藤元 ミヨシ、江上 ミサキ
松延 芳子、金納 イツエ、大塚 珠美、田辺 神奈、江上 貴子
矢賀部 てる子、大塚 ヨシエ、西田 マサル

なお、発掘調査にあたり地権者である江崎 光輝氏をはじめとし、近隣に居住される住民の皆様、そして室岡地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。

また、以下の方々においては調査期間中多大な御指導・御協力を頂きました。記して感謝致します。

（順不同、敬称略、当時）

九州大学研究生 劉 茂源

福岡県教育庁南筑後教育事務所 川述 昭人

福岡県文化財保護指導員 木附 光雄

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳納（水縄）山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦ヶ山地の三国山に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647km²を誇る福岡県下第三位の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、本発掘調査が行われた室岡地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

室岡・山ノ上遺跡2・3次は福岡県八女市室岡字山ノ上に所在している。

当該地周辺は以前より弥生時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られており、特に近年では民間開発事業や国道442号線バイパス建設事業等により、亀ノ甲や山ノ上地区に埋蔵されていた弥生時代後期に属する大規模遺跡の発見が相次いだことから、当地区の弥生時代における概要が明らかになってきた。以下、その概要を記し当遺跡を理解する一助としたい。

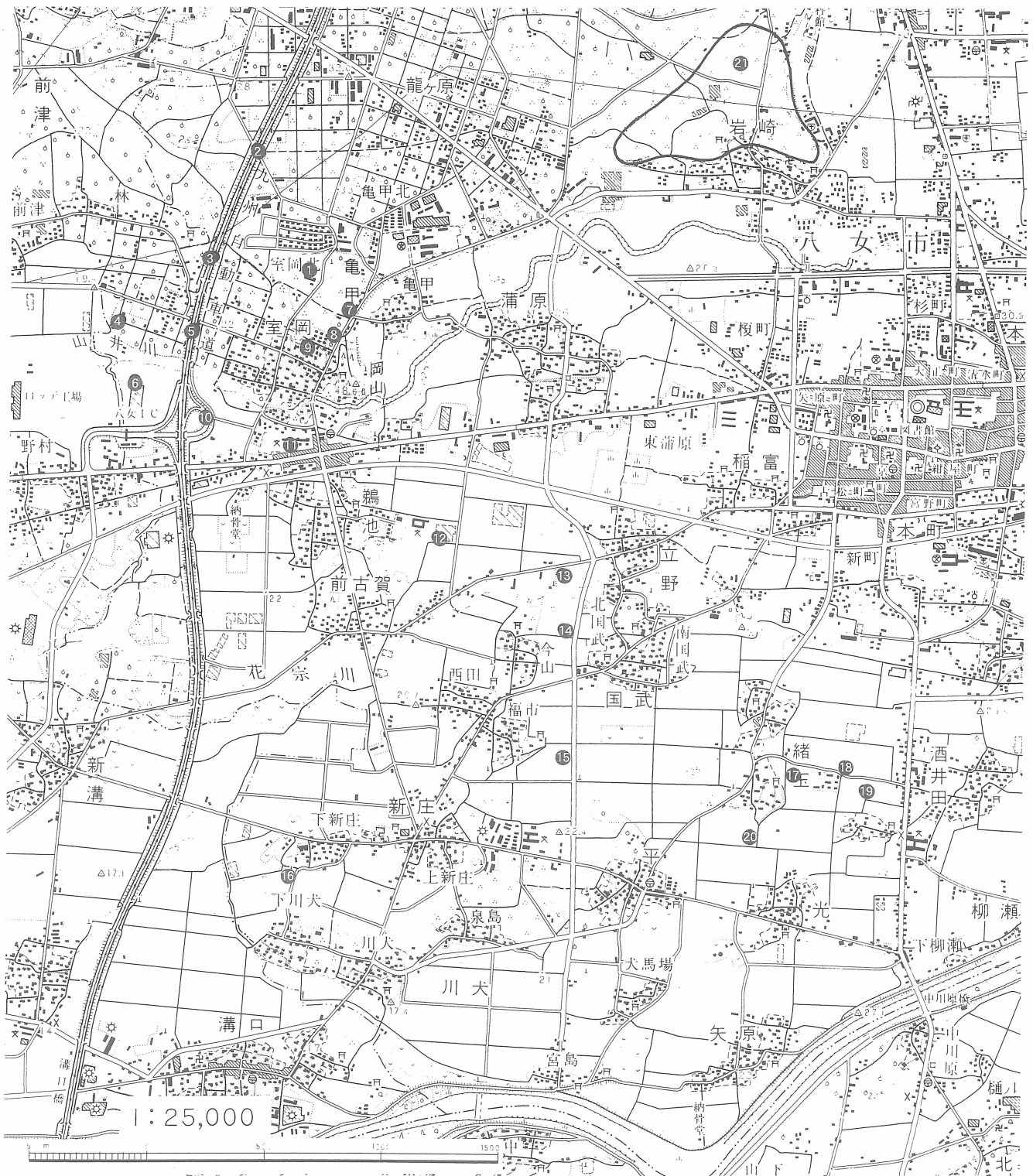
現在、室岡地区における弥生時代最古の遺跡は亀ノ甲遺跡である。弥生時代前期後半に属するこの遺跡は、当時北部九州で盛行していた直径100m程の単環の貯蔵穴専用環濠ではなく、推定直径200m程の規模を有し周囲に多数展開する竪穴住居の状況から居住を伴う環濠集落と考えられている。しかしながら中期前半頃まで存続していた亀ノ甲周辺の遺跡は、それ以降非常に散発的になり事実上放棄されたように土地利用の痕跡が希薄となる。

後期前半になると室岡台地の南西裾部付近の室岡工業団地内遺跡において比較的規模の大きな集落が展開するようになる。この集落群は明確な環濠を持たず、自然河川などの周辺地形を巧みに利用した、いわば受動的な集落構成を呈している。

これと時をほぼ同じくして亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、室岡台地裾部に展開する集落群とは一線を画している。

このような状況は、台地上にある集落の性格が裾部に比べ能動的な集落である事を示すと同時に、室岡遺跡群全体の側面感からも台地上の集落が周辺小集落から隔絶した拠点的な集落である事を示している。

今回報告を行う室岡・山ノ上遺跡2・3次は概観した時期の前半期にあたる遺跡であり、室岡遺跡群の礎を築いた1遺跡として貴重な存在である。



- 1.西山ノ上遺跡1・2次調査 2.西中沢遺跡 3.坊野遺跡 4.弥五郎遺跡 5.野口遺跡 6.室岡工業団地内遺跡
 7.室岡・山ノ上遺跡 8.亀ノ甲遺跡 8.北小路遺跡 10.道添遺跡 11.岡山小学校校庭遺跡 12.樋の口遺跡2次
 13.立野大坪遺跡 14.篠原遺跡 15.中里遺跡 16.六反田遺跡 17.野田遺跡 18.深田遺跡 19.京田遺跡
 20.宿町遺跡 21.岩崎遺跡群

第1図 室岡・山ノ上遺跡(2・3次調査)周辺遺跡分布図 [1/25,000]



1. 西山ノ上遺跡1次調査 2. 西山ノ上遺跡2次調査 3. 室岡・山ノ上遺跡(2次・3次)
 4. 亀ノ甲遺跡 5. 北小路遺跡 6. 岡山小学校校庭遺跡 7. 岡山公園古墳

第2図 室岡・山ノ上遺跡(2・3次調査) 位置図 [1/5,000]

〔第 2 次調査〕

3 調査の内容

A 発掘調査の概要

今回発掘調査を行った2次調査の東側隣接地には昭和56年度に福岡県教育委員会文化課の協力を得て調査を行った室岡山ノ上遺跡(1次)があり、竪穴式住居6軒、貯蔵穴14基、溝3条、土壇墓3基、石棺墓2基、甕棺墓1基が検出されている。この調査は土地の所有者が行った土取り作業中に偶然甕棺墓や石棺墓が発見された事によるものであったが、2・3次調査においては近隣の急速な開発や畑地化による地下げが発端であり、昭和の終わり頃から平成前半にかけて開発行為が増加していった事が分かる。

2次調査は、地権者との協議により1次調査に隣接した部分、約440㎡を対象として発掘調査を行う事とした。表土はバックホウにより除去。人力による遺構検出、及び、掘削を開始した。

3次調査は、2次調査の翌年度となる昭和61年1月13日から開始。2次調査の西側約350㎡を対象とした。

以下においては、各次調査の結果について報告を行う。なお、遺構番号については1次調査から続く遺構毎の連番として番号を付与している。

B 2次調査

1) 遺構と出土遺物

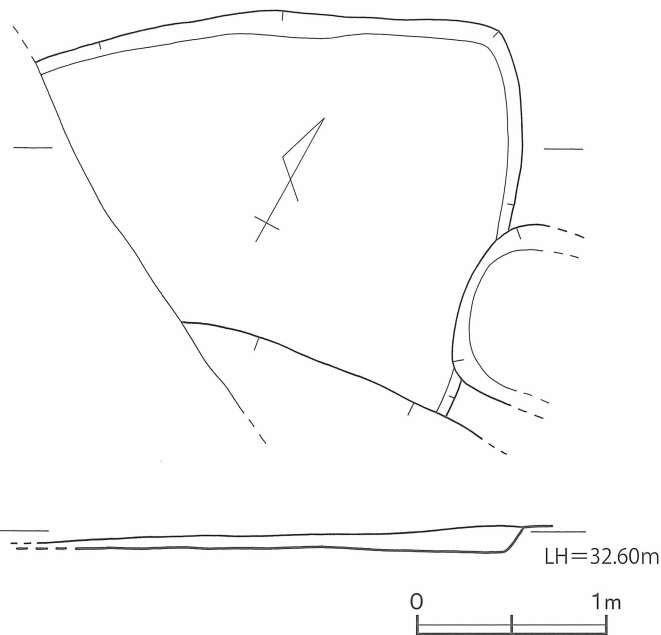
竪穴式住居

7号竪穴式住居〈第4図〉

調査区南端で検出した長方形プランの竪穴式住居である。大溝と15号貯蔵穴に切られている。現存する規模は2.6m×2.1m、深さ0.13mを測る。支柱穴については不明。竪穴式の住居として扱われているが、支柱穴が存在しない事やベッド状遺構等が検出されていない事から、竪穴式の建物とすべきものと思われる。出土遺物はなかった。

8号竪穴式住居〈第5図〉

調査区西端の中央付近で検出した長方形プランを呈すると思われる竪穴式住居である。西側半分は調査区外に延びている。現存する規模は3.45m×2.5m、深さ0.3mを測る。支柱穴については不明であるが、床面からは小規模なピットが4個検出されている。8号も7号と同様、竪穴式の住居として扱われているが、支柱穴が明確ではない事やベッド状遺構等が検出されていない事から、



第4図 7号竪穴式住居 実測図 [1/40]

竪穴式の建物とすべきものと思われる。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕・壺等の小破片がある。

9号竪穴式住居〈第 6 図〉

調査区東端の中央付近で検出した竪穴式住居である。遺構本体の大半部分を土取りにより削平されている。現存する規模は $1.94\text{m} \times 1.8\text{m}$ 、深さ 0.15m を測る。支柱穴については不明。住居外の北西部分に柱穴が見られるが、関連性は不明。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕の小破片がある。

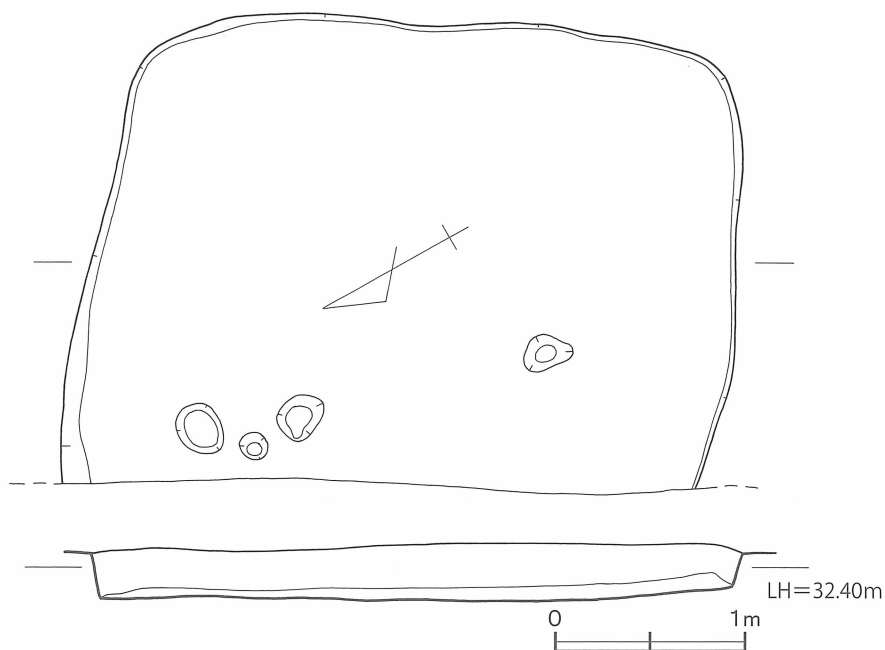
10号竪穴式住居〈第 7 図〉

調査区西端の北東隅付近で検出した竪穴式住居である。比較的時期の新しい小穴(攪乱)に切られている。9号と同様遺構本体の大半部分を土取りにより削平されており、現存する規模は $2.9\text{m} \times 1.3\text{m}$ 、深さ 0.25m を測る。支柱穴については不明であるが、住居内の北西隅からはやや深めのピットが検出され、内部からは $13\text{cm} \times 16\text{cm}$ の粘土塊が出土した。住居の廃絶に関わる出土物の可能性もある。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕・壺等の小破片、及び、すり石がある。

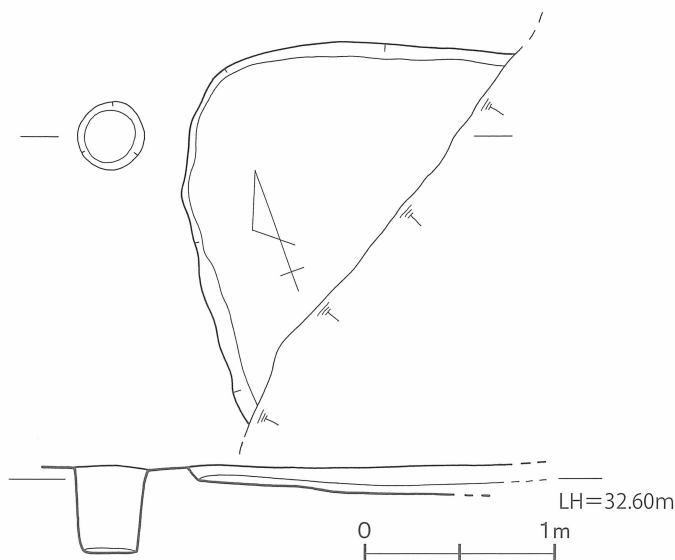
貯蔵穴

15号貯蔵穴〈第 8 図〉

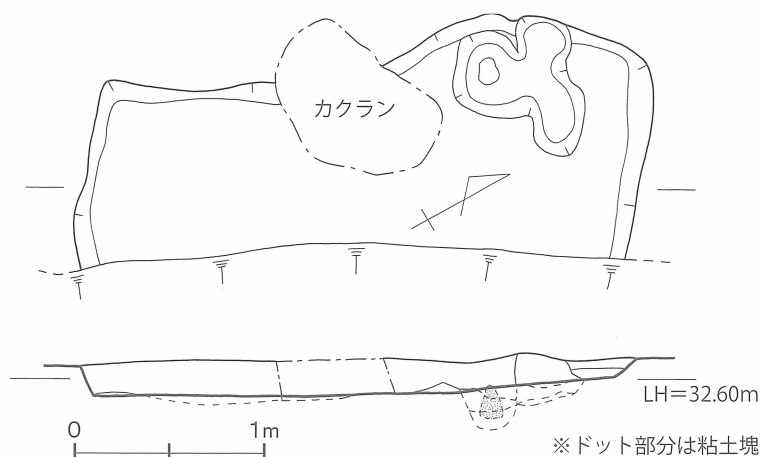
調査区南東端で検出した、やや楕円形を呈する隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-79^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.4\text{m} \times 1.0\text{m}$ 、深さ 0.3m を測る。7号竪穴式住居を切り込んでおり、



第 5 図 8号竪穴式住居 実測図 [1/40]



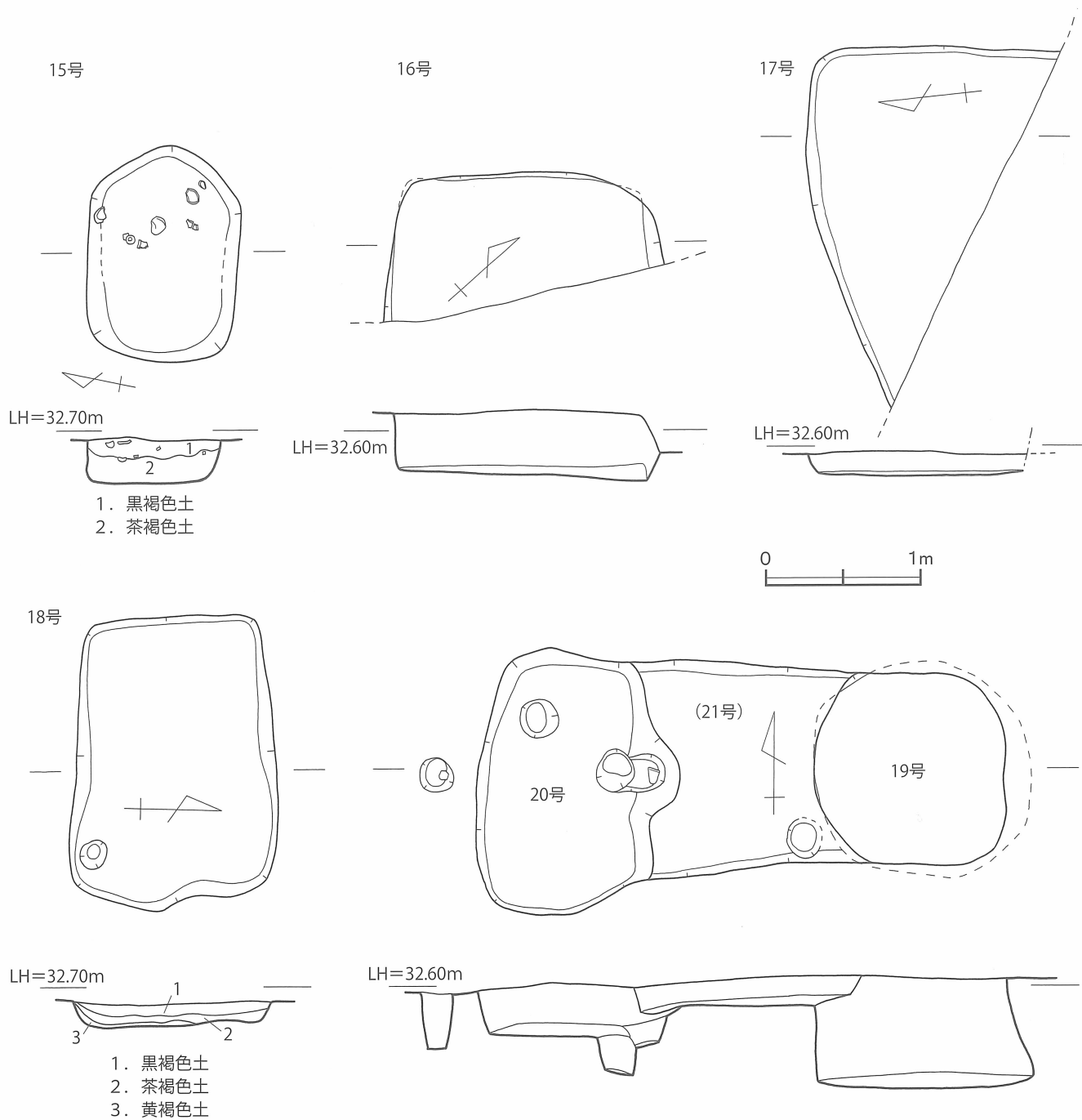
第 6 図 9号竪穴式住居 実測図 [1/40]



第 7 図 10号竪穴式住居 実測図 [1/40]



第 3 図 室岡・山ノ上遺跡（2・3次調査）遺構配置図 [1/100]



第 8 図 15～(21)号 貯蔵穴 実測図 [1/40]

貯蔵穴群の中では新しい時期に属するものと考えられる。

図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕・壺等の小破片がある。

16号貯蔵穴〈第 8図〉

調査区東端中央で検出した、長方形を呈する貯蔵穴である。長軸方位をN-45°-Eに取る。規模は1.75m×1.1m以上、深さ0.45mを測る。土取り作業により中央より東半分を失っている。

出土遺物として、如意状の口縁部を有する弥生式土器の甕がある。

17号貯蔵穴〈第 8図〉

調査区南端中央で検出した貯蔵穴である。全体の半分以上が調査区外にあり、全体のプランは不明である。長軸方位を $N-84^{\circ}-E$ に取る。規模は $2.33m \times 1.64m$ 以上、深さ $0.15m$ を測る。土取り作業により中央より東半分を失っている。

7号竪穴式住居に隣接し、形状や断面形が類似していることから竪穴式住居の可能性も考えたい。

18号貯蔵穴〈第 8図〉

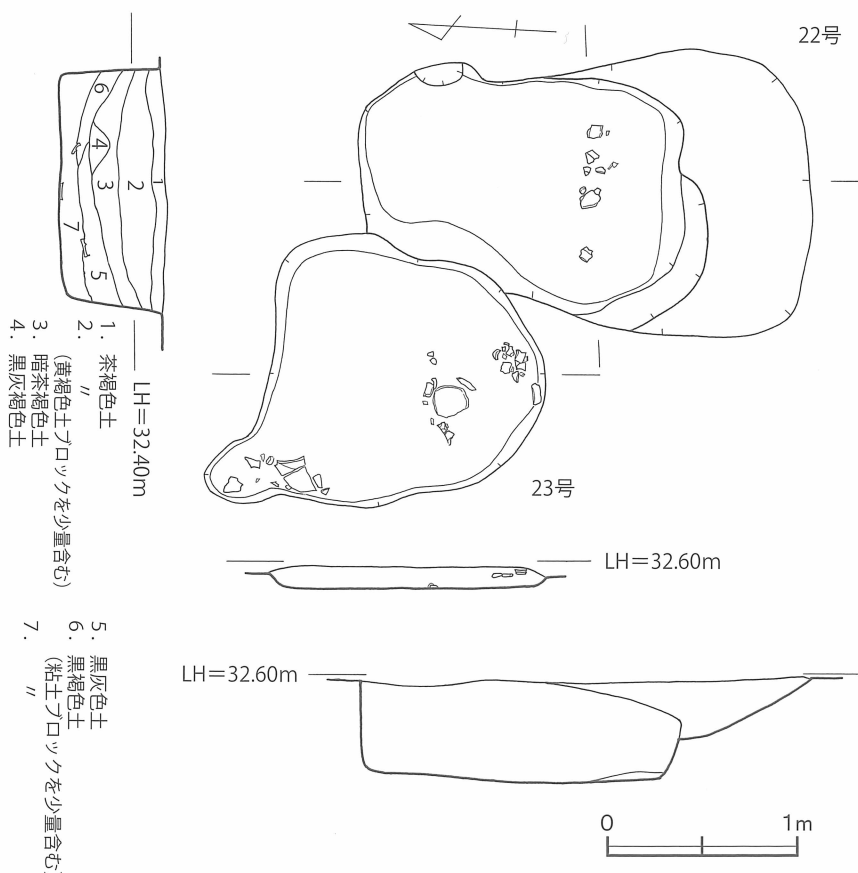
調査区南端で検出した、長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-89^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.9m \times 1.34m$ 、深さ $0.15m$ を測る。周辺に展開する15号・19～21号貯蔵穴とは磁北に対する角度の類似性から同一群の可能性が高く、同じ時期に同時に存在していたものと考えられる。

19・20・21号貯蔵穴〈第 8図〉

調査区南端で検出した貯蔵穴である。発掘調査当初は3基別々の貯蔵穴として理解されていたが、平面プランや断面形の状況を再度観察した結果、2基の貯蔵穴を半地下式の通路で連結させた運用上1基の貯蔵穴として機能していたものと判断した。西側にある長方形プランの貯蔵穴には直径 $25cm$ 、深さ $20 \sim 25cm$ のピットが東壁沿いに2穴穿たれており、そのうちの1穴は底面を半地下通路側に向けていることから、昇降用の梯子が架けられていたものと推定できる。長軸方位を $N-6^{\circ}-E$ に取り、全体の規模は長さ $3.6m \times 1.4m \sim 1.7m$ 、深さ $0.35m \sim 0.7m$ を測る。

東側、西側の貯蔵穴は平面プランも深さも異なるが、これは内蔵していた貯蔵物による性格差に由来すると思われるが、貯蔵品については不明である。

図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕・壺等の小破片がある。



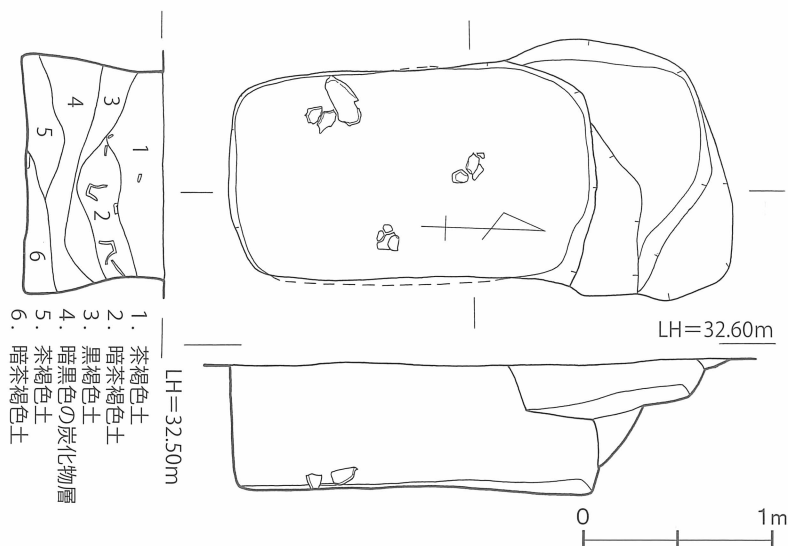
22号貯蔵穴〈第 9図〉

調査区南端で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-3^{\circ}-W$ に取る。規模は $2.36m \times 1.52m$ 、深さ $0.52m$ を測る。23号貯蔵穴に切られている。出土遺物としてサヌカイト製の石鏃がある。図示はしていないが、弥生式土器の甕・壺等の小破片がある。

第 9図 22・23号貯蔵穴 実測図 [1/40]

23号貯蔵穴〈第9図〉

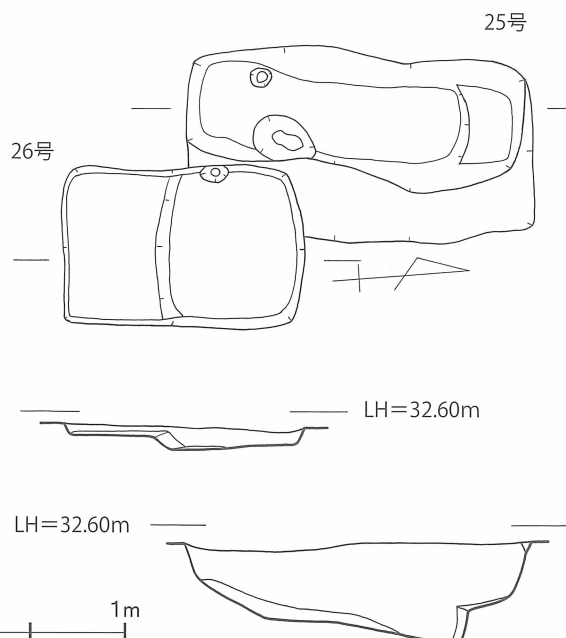
調査区南端で検出した、やや不整形を呈する方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-3°-Wに取る。規模は1.8m×1.44m、深さ0.11mを測る。22号貯蔵穴を切り込んでおり、貯蔵穴群の中では新しい時期に属するものと考えられる。出土遺物として、弥生式土器の壺・鉢形等が出土している。特に壺は頸部が長く、胴部の肩も張っていないことから中期前半を遡らないものと思われる。



第10図 24号貯蔵穴 実測図 [1/40]

24号貯蔵穴〈第10図〉

調査区南端で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-2°-Wに取る。規模は2.66m×1.35m、深さ0.67mを測る。22号貯蔵穴と同様、貯蔵穴内への昇降口と考えられる緩やかな斜面を有しているが、22号のものとは逆方位に付設している。この現象は貯蔵穴の造営者が隣接する貯蔵穴に対し、地上部分に接地されている昇降用の覆い屋根がそれぞれを干渉しないように工夫した痕跡だと思われる。長軸方向の同一性から考えても、この2基の貯蔵穴は同時に築造されたものであろう。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕・壺等の破片、石皿等がある。



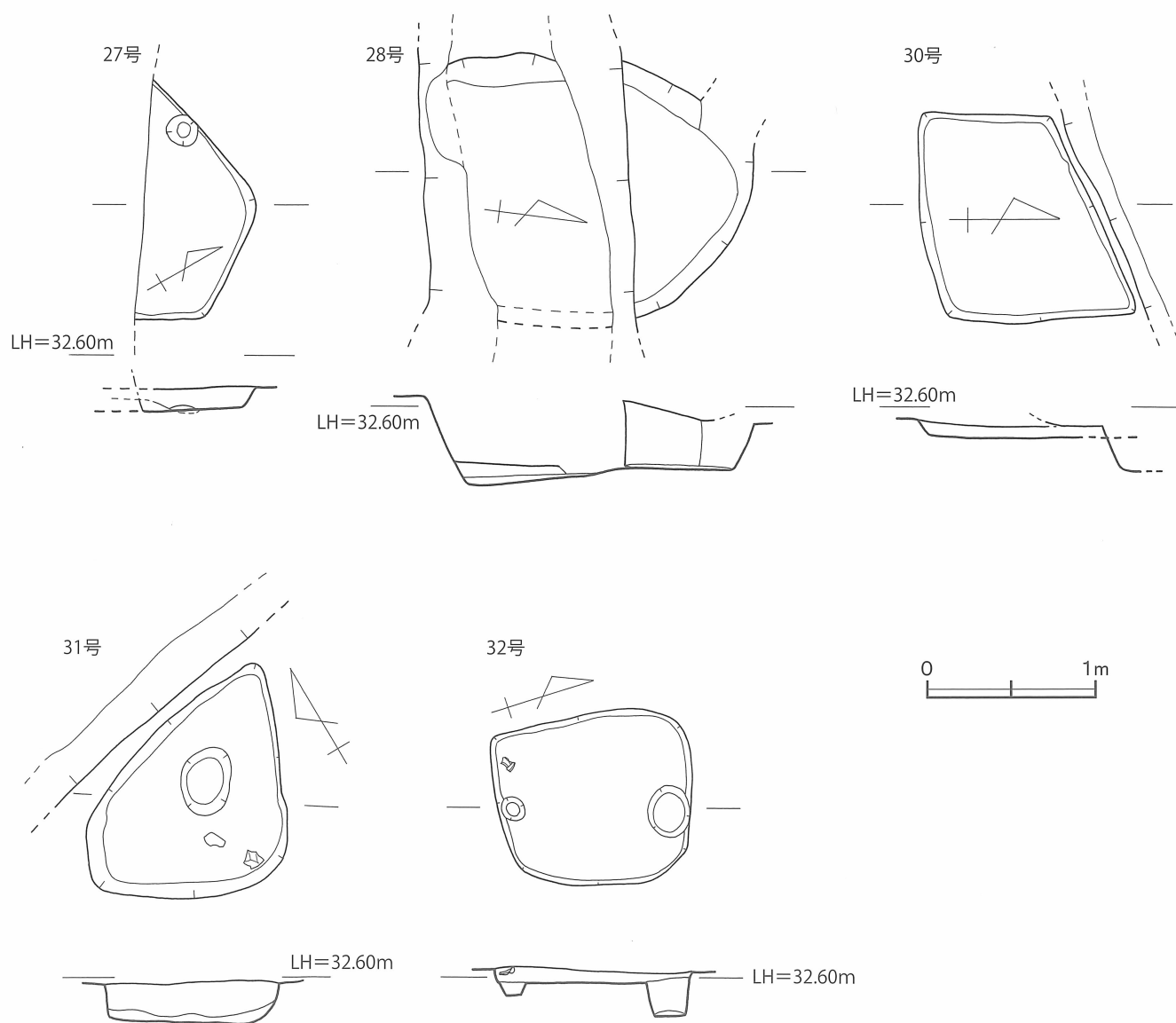
25号貯蔵穴〈第11図〉

調査区南端で検出した貯蔵穴である。南東端の一部を26号貯蔵穴によって切られている。長軸方位をN-4°-Eに取る。規模は1.82m×1.03m以上、深さ0.52mを測る。土壌底面は北に向かって傾斜し、北端には40cm×30cm程のフラット部分がつく。また、通常の貯蔵穴とは異なり、緩斜面が小口部分ではなく長辺側に付設されている。単体だけをみると土壌墓的な要素が感じられるが、周辺状況からここでは貯蔵穴の1つとして捉えておく。

第11図 25・26号貯蔵穴 実測図 [1/40]

26号貯蔵穴〈第11図〉

調査区南端で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-4°-Eに取る。規模は1.28m×0.86m、深さ0.12mを測る。25号貯蔵穴を切り込んでおり、貯蔵穴群の中では新しい時期に属するものと考えられる。遺存状況は極めて悪く、上部構造はわからない。また、貯蔵穴本体の底面とやや高い南側フラット面の差が10cm程しかなく、貯蔵の用途が不明確である。



第12図 27・28・30～32号貯蔵穴 実測図 [1/40]

27号貯蔵穴〈第12図〉

調査区南西端で検出した、平面プラン不明の貯蔵穴である。長軸方位も不明。規模は現存部分で 1.44m × 0.66m、深さ 0.13m を測る。本体の大半部分が調査区外にあり、詳細は不明。

28号貯蔵穴〈第12図〉

調査区中央で検出した、やや不整形を呈する方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 7^{\circ} - W$ に取る。規模は 1.96m × 1.58m、深さ 0.52m を測る。調査区の中央を斜角方向に流路をとる中世溝に本体の半分以上を切られている。平面の状況が23号貯蔵穴と類似している。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の小破片がある。

29号貯蔵穴〈第13図〉

調査区南西端で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 86^{\circ} - W$ に取る。規模は 2.2m ×

1.87m、深さ 0.58m を測る。本体の半分以上が調査区の外側にあるが、深さもあり底面にピット等も確認出来ない事から竪穴式住居ではなく貯蔵穴と判断した。

図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の小破片がある。

30号貯蔵穴〈第12図〉

調査区南西で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を磁北と同一に取る。規模は 1.3m × 1.23m、深さ 0.1m を測る。中世溝に切られており、本体の半分以上を失っている。

31号貯蔵穴〈第12図〉

調査区中央の南側で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 25^\circ - E$ に取る。規模は 1.58m × 1.19m、深さ 0.25m を測る。本体北側を中世溝に切られている。深さがあまりないが、底面に直径 30cm ~ 40cm、深さ 30cm のピットがあり、埋土の堆積も短期間で埋まった状況を示している事から落とし穴の可能性もあったが、地形や周辺の状況から貯蔵穴と判断した。図示はしていないが、底面付近から石材が数点確認されている。

32号貯蔵穴〈第12図〉

調査区中央で検出した隅丸方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 18^\circ - E$ に取る。規模は 1.18m × 1.04m、深さ 0.1m を測る。底面に見られるピットは、本遺構に関連したものか否かは判断出来ない。図示はしていないが、出土遺物として、弥生式土器の甕底部の小破片がある。

33号貯蔵穴〈第14図〉

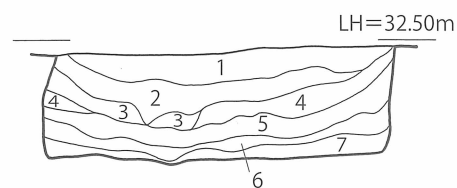
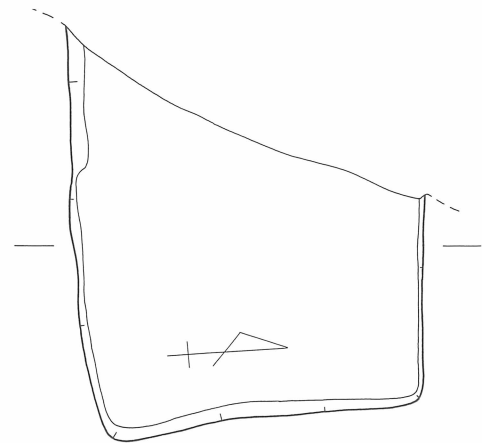
調査区中央で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 19^\circ - E$ に取る。規模は 2.5m × 1.8m、深さ 0.48m を測る。34号貯蔵穴に切られている。出土遺物として、弥生式土器の甕がある。

34号貯蔵穴〈第14図〉

調査区中央で検出した円形の貯蔵穴である。規模は直径 1.9m、深さ 0.75m を測る。壁面がややオーバーハング気味になっている事から本来の断面形状はフラスコ型であったものと考えられる。33号・36号貯蔵穴を切っており、貯蔵穴群の中では最も新しい時期に属するものと考えられる。

35号貯蔵穴〈第14図〉

調査区中央で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 68^\circ - E$ に取る。規模は 2.05m × 1.38m、深さ 0.76m を測る。34号貯蔵穴と同様、壁面がオーバーハングし斜角となっている事から断面形状は

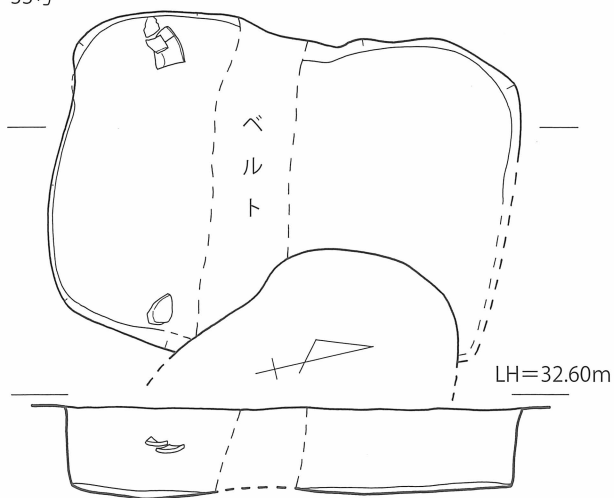


1. 黒褐色土
2. 黄褐色土 (黒色土を少量含む)
3. 黄褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黒褐色土 (炭化物含む)
6. 黒褐色土 (黄褐色粘土ブロック含む)
7. "

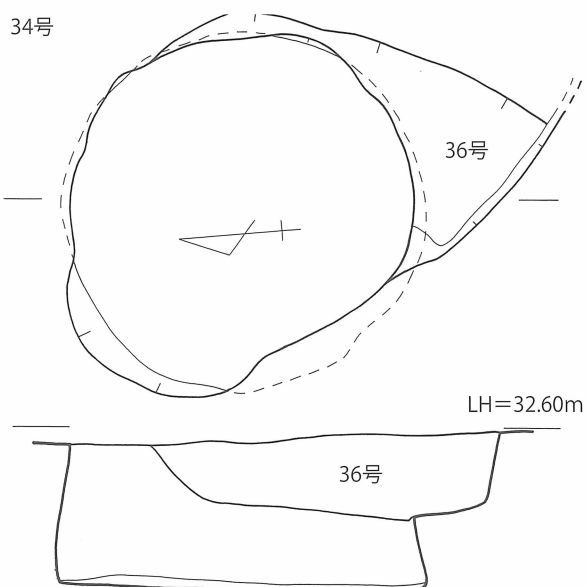


第13図 29号貯蔵穴 実測図 [1/40]

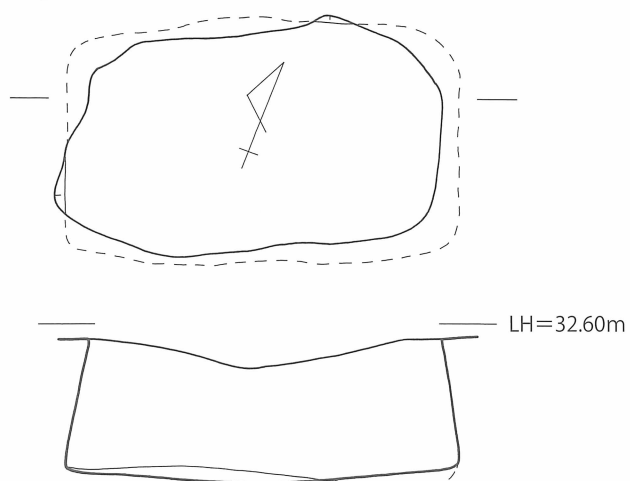
33号



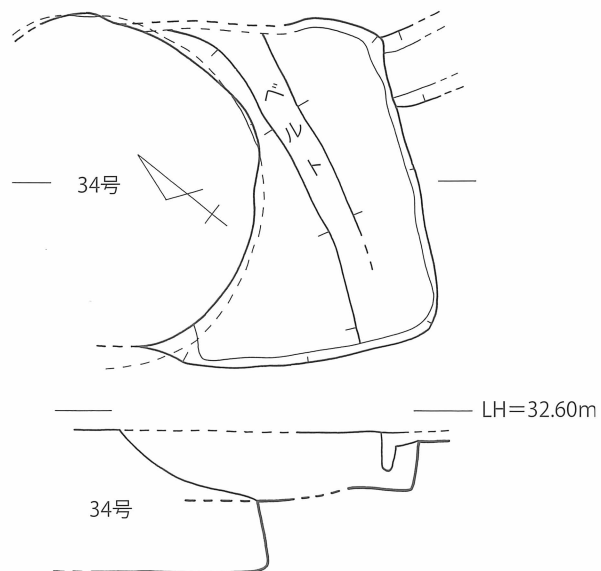
34号



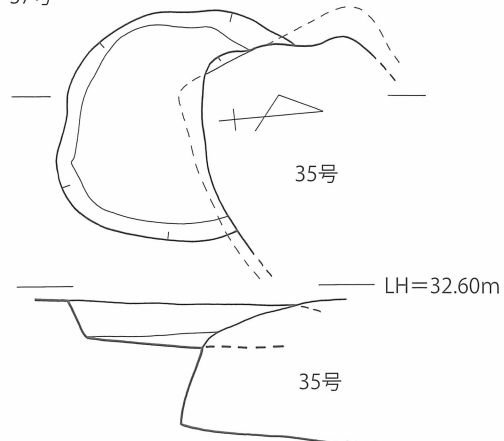
35号



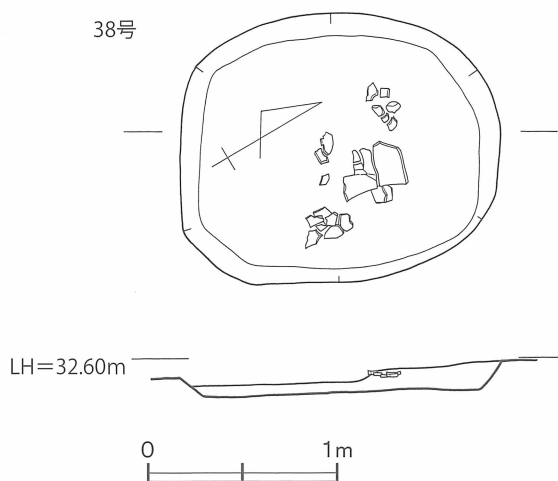
36号



37号

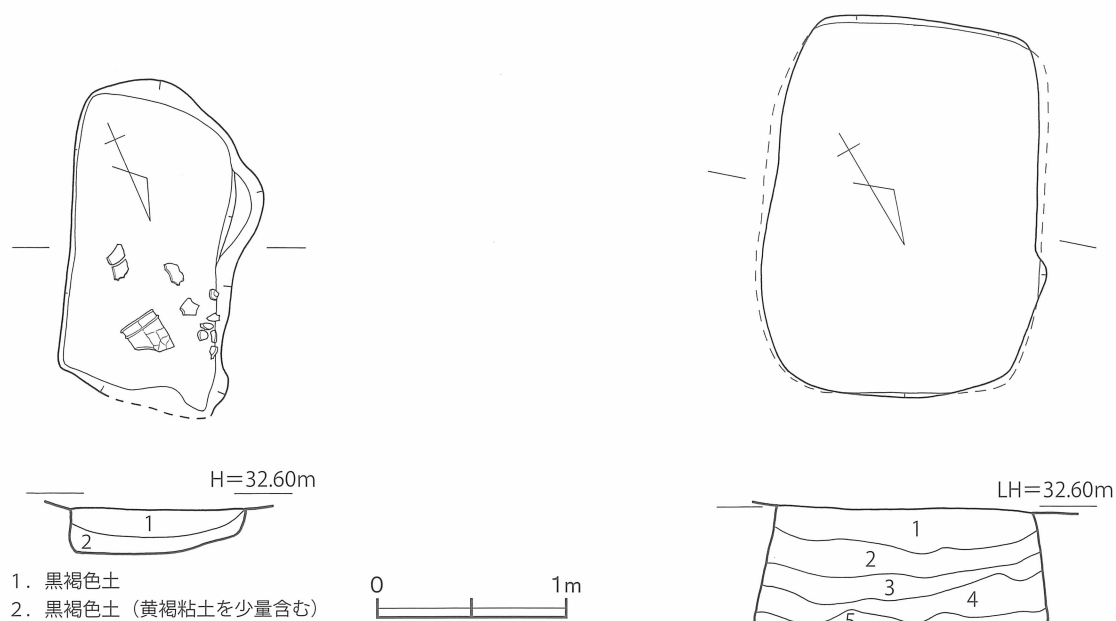


38号



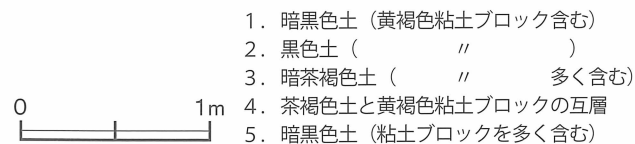
0 1m

第14図 33~38号貯蔵穴 実測図 [1/40]



第15図 39号貯蔵穴 実測図 [1/40]

フラスコ型を成していたものと考えられる。長方形タイプの貯蔵穴群中では新しい時期に属するものであるかもしれない。



第16図 40号貯蔵穴 実測図 [1/40]

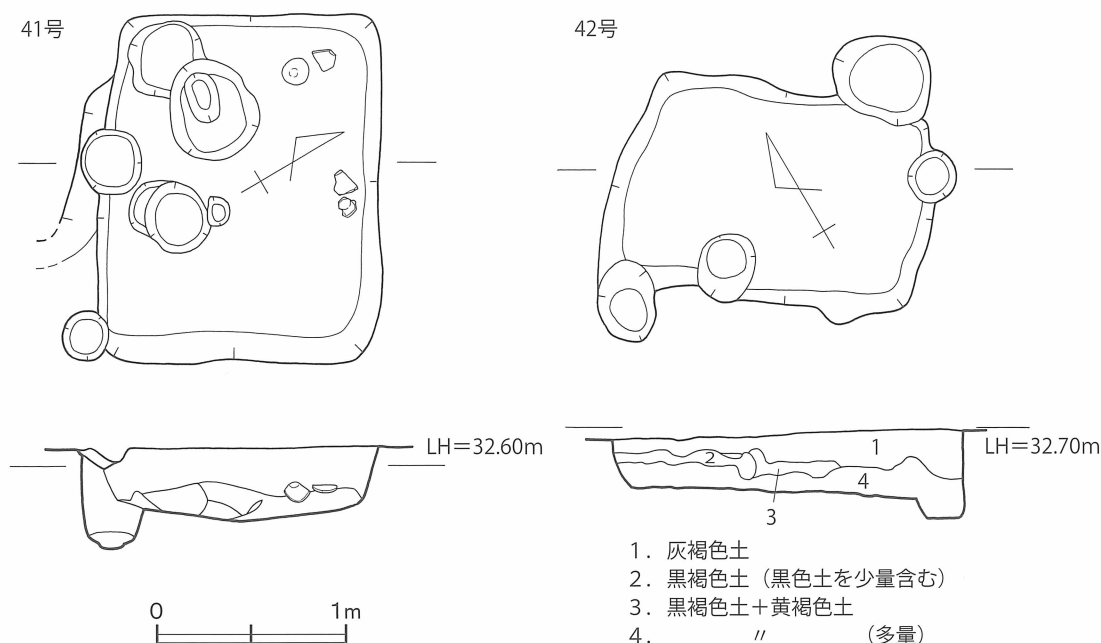
36号貯蔵穴〈第14図〉

調査区中央で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-39^{\circ}-W$ に取る。規模は $1.78m \times 1.35m$ 、深さ $0.36m$ を測る。34号貯蔵穴に切られている。

出土遺物として、弥生式土器の深鉢形の小型甕がある。

37号貯蔵穴〈第14図〉

調査区中央で検出した円形、又は、隅丸方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る。規模は現存部分の最大長 $1.3m$ 、深さ $0.23m$ を測る。35号貯蔵穴に切られており、平面形状を把握する事が困難である。出土遺物



第17図 41・42号貯蔵穴 実測図 [1/40]

として、弥生式土器の小型の鉢や甕の破片がある。

38号貯蔵穴〈第14図〉

調査区北端で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-31°-Eに取る。規模は1.69m×1.42m、深さ0.15mを測る。出土遺物として、弥生式土器の甕の破片がある。

39号貯蔵穴〈第15図〉

調査区北端付近で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-29°-Eに取る。規模は1.7m×1.0m、深さ0.23mを測る。出土遺物として、弥生式土器の甕の破片がある。

40号貯蔵穴〈第16図〉

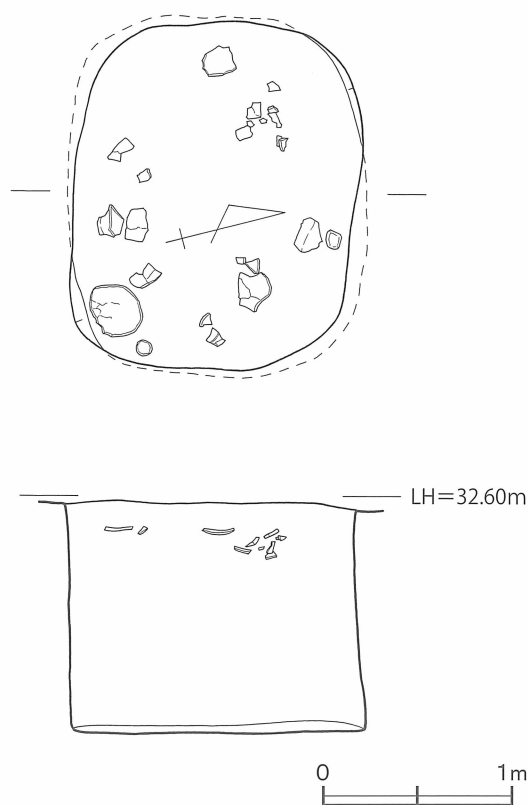
調査区北端で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-34°-Eに取る。規模は1.97m×1.44m、深さ0.65mを測る。35号貯蔵穴と同様に壁面がオーバーハングしている。

41号貯蔵穴〈第17図〉

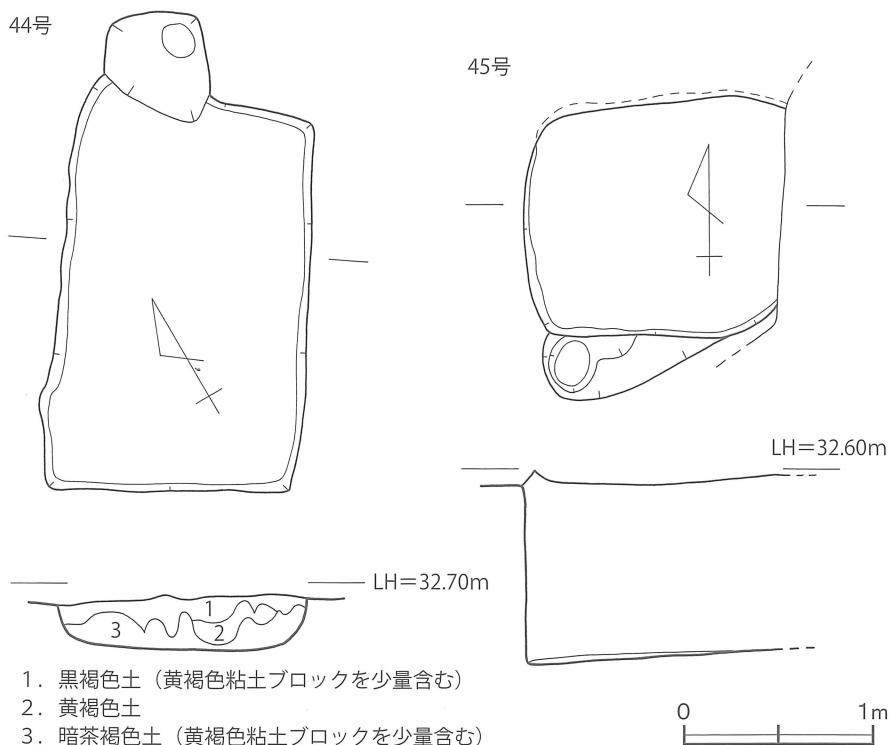
調査区北端で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-60°-Wに取る。規模は1.83m×1.47m、深さ0.38mを測る。南西壁の中央部に直径35cm、深さ55cmのピットが1穴穿たれており、昇降用の梯子が架けられていた可能性もある。出土遺物として、弥生式土器の小型の壺や甕の破片がある。

42号貯蔵穴〈第17図〉

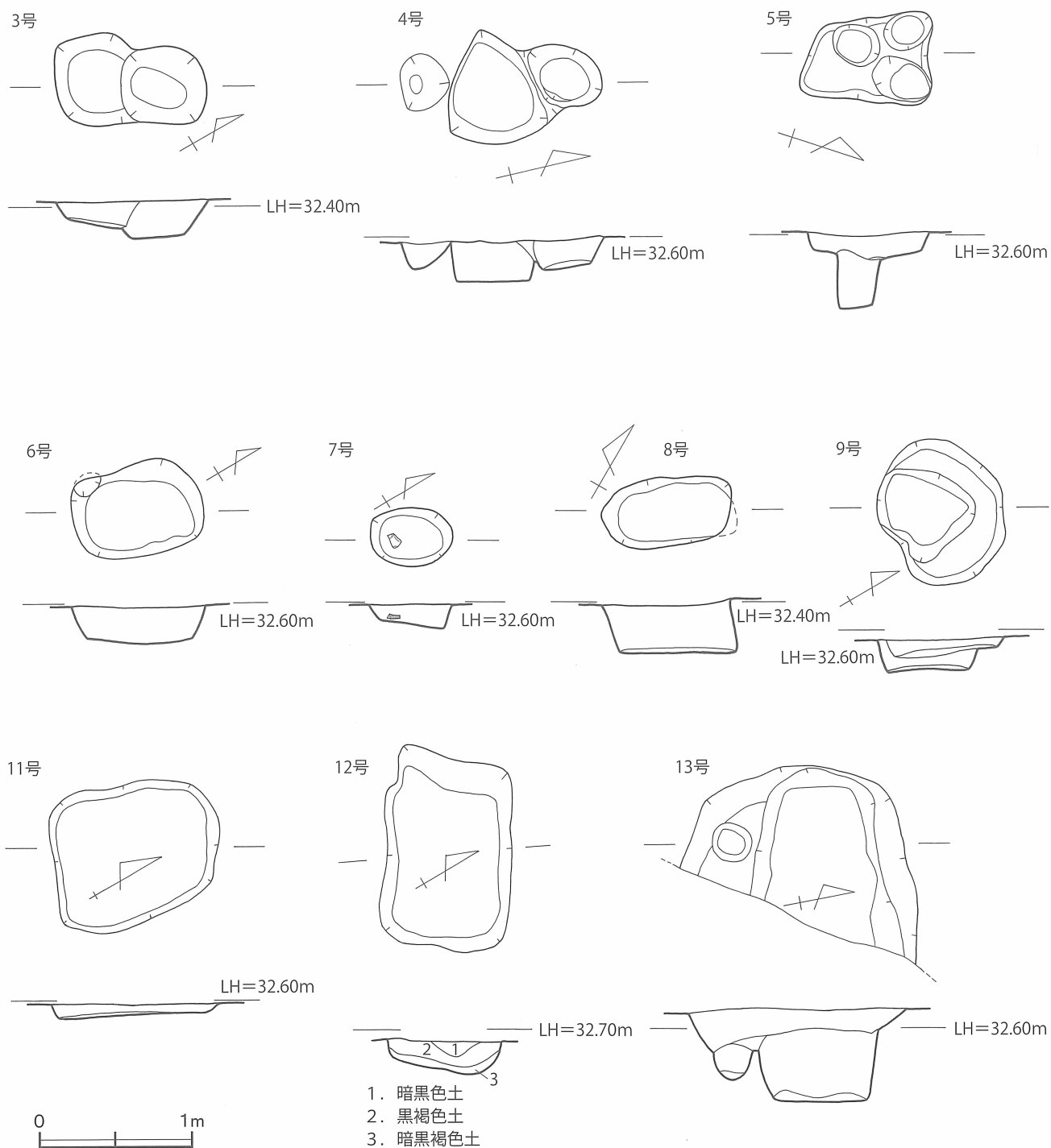
調査区北端付近で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-50°-Wに取る。規模は1.75m×1.1m、深さ0.36mを測る。東壁と南壁にそれぞれ1穴が穿たれているが、南壁の1穴は断面に大きな斜角があり、昇降用の梯子が架けられていたと考えられる。



第18図 43号貯蔵穴
実測図 [1/40]



第19図 44・45号貯蔵穴 実測図 [1/40]



第20図 3～9・11～13号土坑 実測図 [1/40]

4 3号貯蔵穴〈第18図〉

調査区北端付近で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 15^\circ - E$ に取る。規模は $1.85m \times 1.5m$ 、深さ $1.22m$ を測る。遺存状況が非常に良く、底面付近の壁が直立するタイプの貯蔵穴は断面形がフラスコ型にならない事を明らかにしている。出土遺物として、弥生式土器の甕の底部破片やサヌカイト製の石鏃、窪み石などがある。

4 4号貯蔵穴〈第19図〉

調査区北端付近で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N - 34^\circ - E$ に取る。規模は $2.2m \times$

1.3m、深さ 0.28m を測る。土層断面を見ると、埋土の堆積状況がやや不安定である事から、貯蔵穴以外の用途も考えなければならないと思われる。

45号貯蔵穴〈第19図〉

調査区西側中央で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位は磁北と直交する。本体の半分近くを土取り作業で失っており、規模は現存で 1.4m × 1.32m、深さ 0.95m を測る。43号貯蔵穴と同タイプのもので、壁面が直立している。出土遺物として、弥生式土器の甕や壺の破片がある。

土壇

3号土壇〈第20図〉

調査区南西端で検出した円形の土壇である。規模は最大長 0.6m、最大幅 0.58m、深さ 0.17m を測る。ピットに切られ、一部を欠失している。

4号土壇〈第20図〉

調査区南側で検出した不整円形の土壇である。規模は最大長 0.75m、最大幅 0.63m、深さ 0.27m を測る。土壇周辺に展開するピットとの関係は不明。

5号土壇〈第20図〉

調査区南側で検出した不整長方形の土壇である。長軸方位を N - 17° - W に取る。規模は 0.87m × 0.62m、深さ 0.18m を測る。土壇内にあるピットとの関連は不明であるが、本土壇の性格として、柱穴と掘り方である可能性も考えられる。

6号土壇〈第20図〉

調査区中央付近で検出した隅丸長方形の土壇である。長軸方位を N - 20° - E に取る。規模は 0.86m × 0.61m、深さ 0.25m を測る。

7号土壇〈第20図〉

調査区中央付近で検出した長円形の土壇である。規模は最大長 0.54m、最大幅 0.37m、深さ 0.15m を測る。図示していないが、土壇内からは砥石の破片が出土している。

8号土壇〈第20図〉

調査区中央で検出したやや長円形気味を呈する隅丸長方形の土壇である。長軸方位を N - 60° - E に取る。規模は 0.87m × 0.46m、深さ 0.36m を測る。長軸方向の壁面が同一方向に斜角となっている事から土壇墓である可能性も考えられる。土壇墓であるならば規模からみて小児用と思われ、若年の近親者に対する当時の死生観を垣間見る事が出来る。

9号土壇〈第20図〉

調査区中央で検出した不整円形の土壇である。規模は最大長 0.95m、深さ 0.2m を測る。段掘り構造になっているが、周辺には高床建物の痕跡は見当たらないため、柱穴の掘り方ではない。性格不明。

10号土壌

調査区中央西端で検出した円形を呈するものと思われる土壌である。円弧の状況から推定した直径は約2.0mで、深さ0.15mを測る。土壌の大半が調査区外にあり、詳細な状況は不明である。

11号土壌〈第20図〉

調査区北側で検出した不整形な隅丸方形の土壌である。長軸方位をN-15°-Eに取る。規模は1.12m×0.94m、深さ0.1mを測る。

12号土壌〈第20図〉

調査区北端で検出した長方形の土壌である。長軸方位をN-60°-Wに取る。規模は1.36m×0.85m、深さ0.22mを測る。土壌の底面北側が一部船底状に窪んでおり、断面観察では土壌墓の可能性を考えたが、周辺の遺構群の状況では貯蔵穴の可能性が高い。

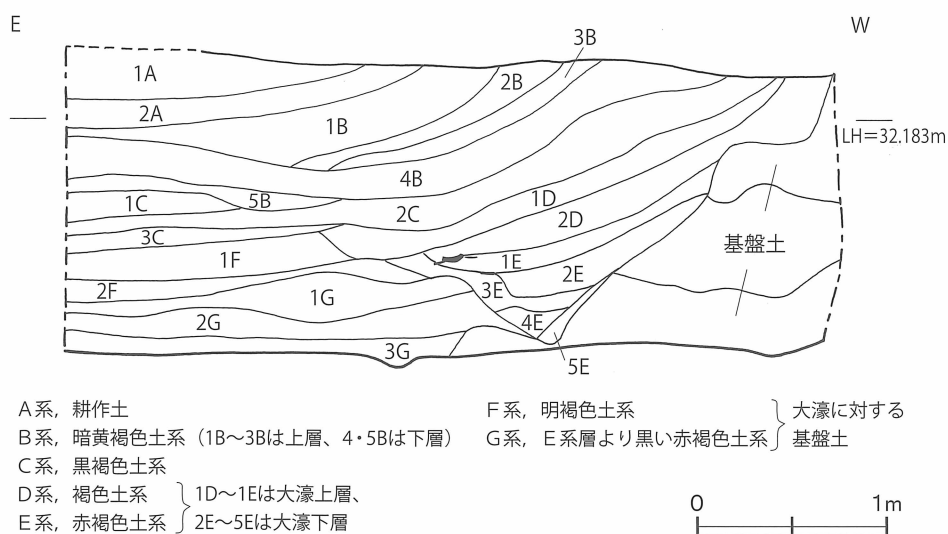
13号土壌〈第20図〉

調査区北側東端で検出した長方形プランを呈すると考えられる土壌である。長軸方位をN-79°-Wに取る。2段構造になっており、規模は現存で上段部分が1.3m×1.56m、深さ0.28mを測り、下段部分が1.3m×1.0m、深さ0.6mを測る。平面形・断面形のいずれの観察においても本遺構が土壌墓である可能性が最も高い。同形状を成す土壌墓は周辺遺跡においても多数見られる。

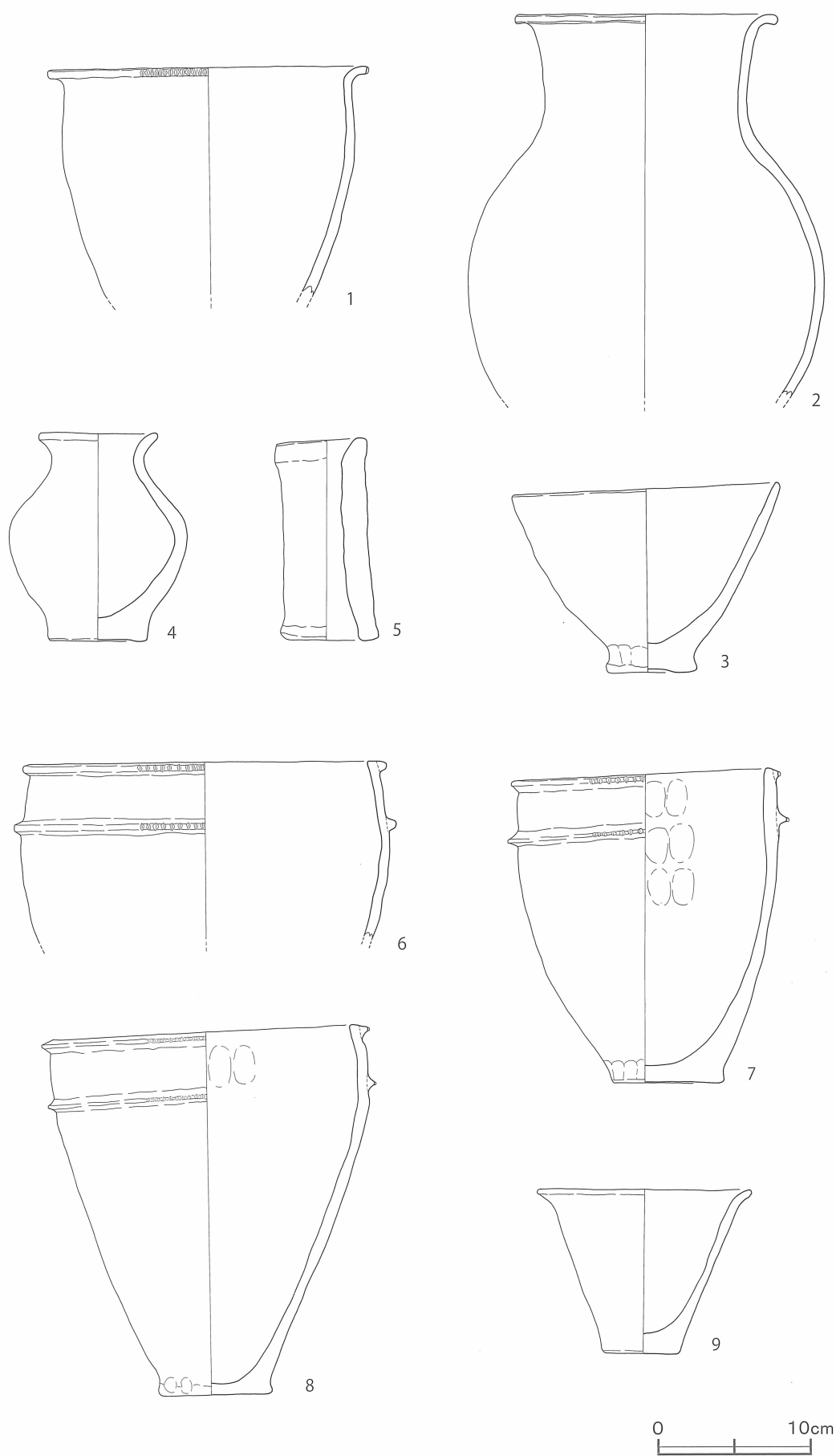
大濠

大濠〈第3・21図〉

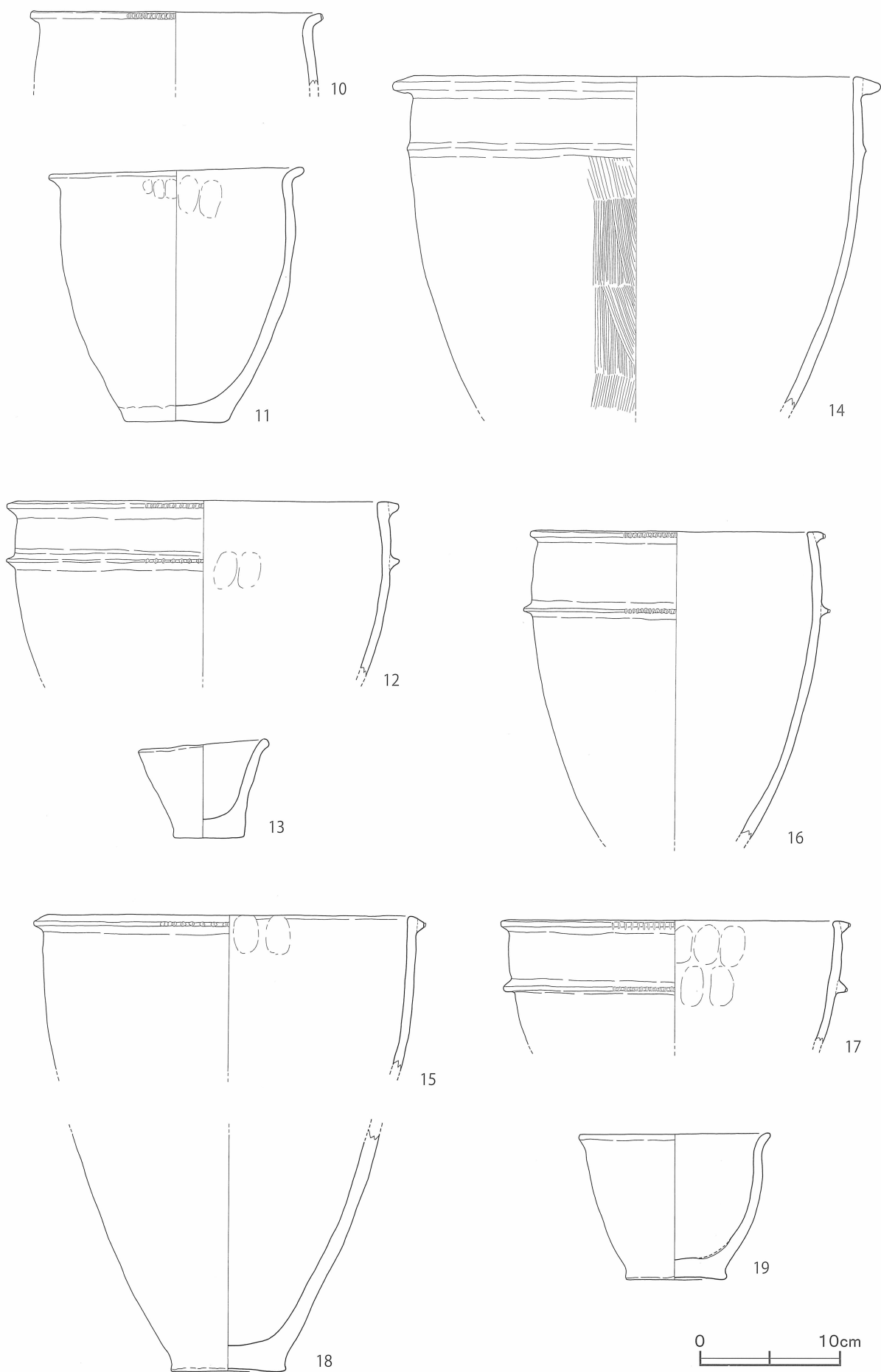
調査区南東端で検出した溝。比較的大規模な遺構であるが、そのほとんどが調査区外、又は、土取り作業により滅失してしまっているため、規模については不明である。現状での深さは1.55mを測る。土層断面の観察から大きく3時期に分かれる。第1期は1D~5E層までで、弥生時代前期に属するV字溝がこれにあたる。第2期は1B~3Cまでで、弥生時代後期に属する断面形が逆台形の環濠の一部と考えられる部分があたる。第3期は1A・2A層で、この両層は後世の耕作により堆積した層である。つまり、前期溝を後期の溝が切った状況となっている。しかしながら、両溝とも検出された範囲が非常に狭く、溝の方向性や幅についての情報が全く欠落している。あえて言うならば、等高線に沿って溝が走っていることから、下層のV字溝については亀ノ甲遺跡の一部であり、福岡市の板付遺跡に見られる弦状濠のような区画用の溝であった可能性がある。また、上層の逆台形の



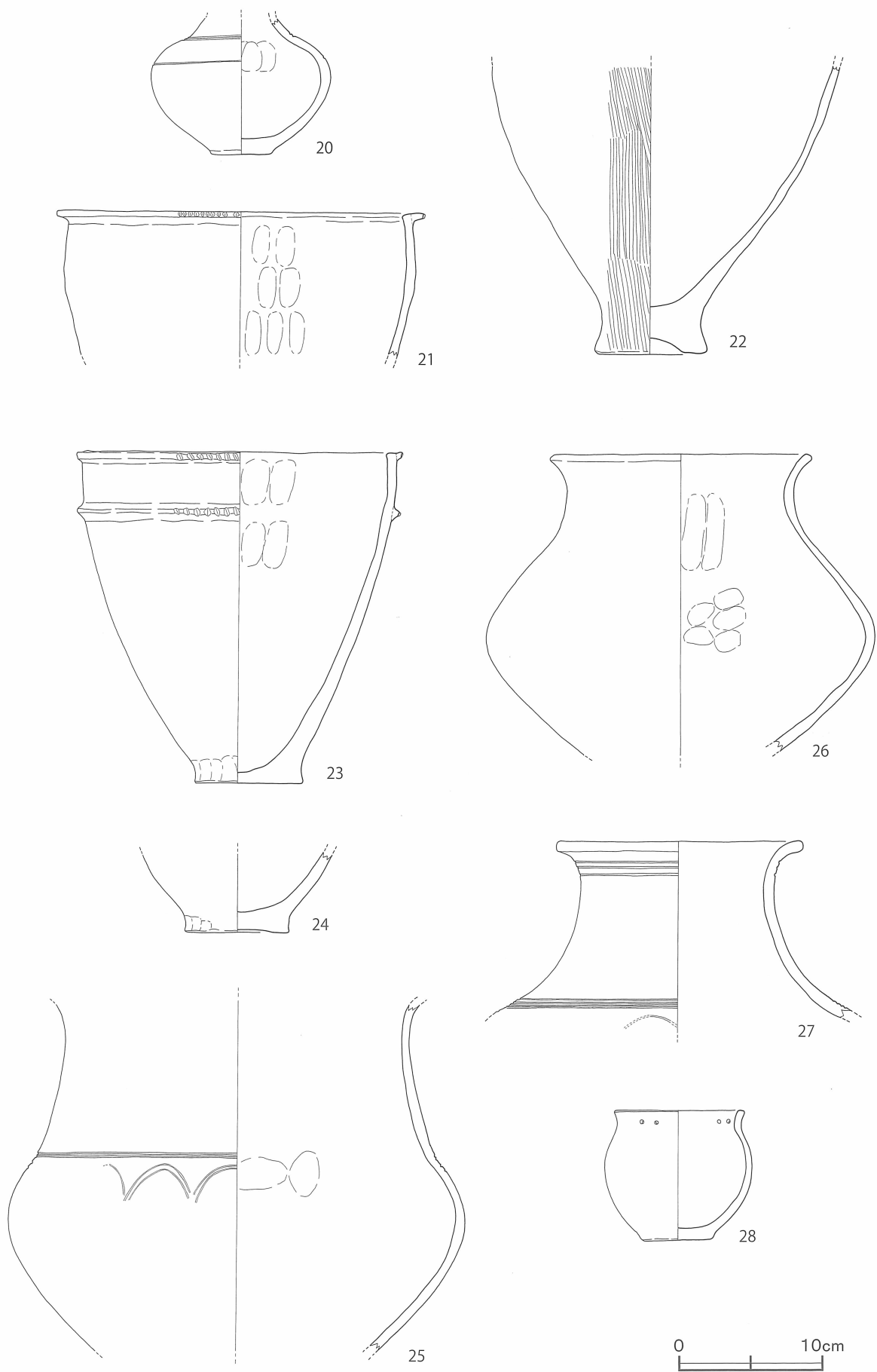
第21図 大濠土層断面 実測図 [1/40]



第22図 貯蔵穴 出土土器 実測図〔1／4〕



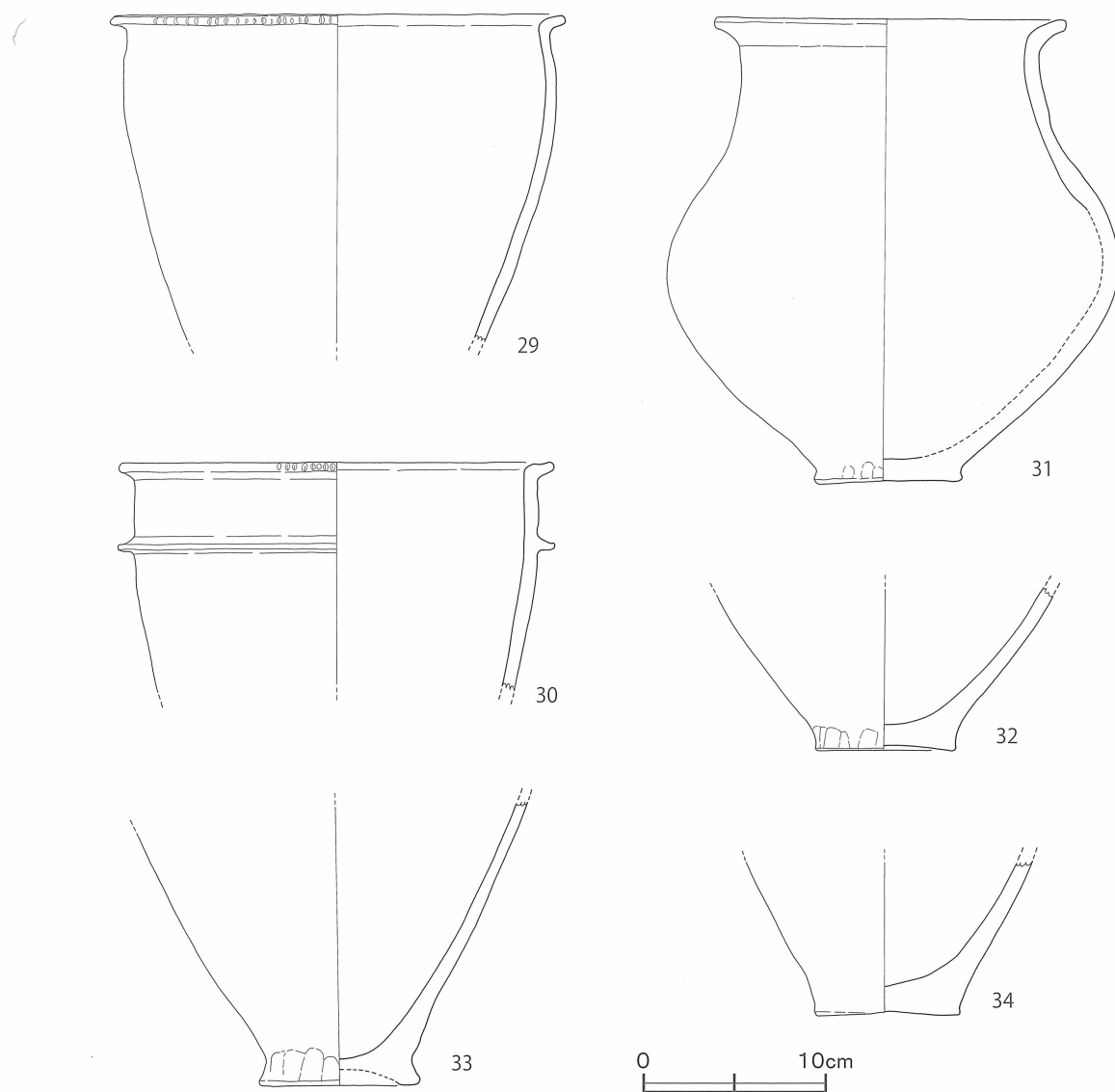
第23図 貯蔵穴 出土土器 実測図 [1/4]



第24図 貯蔵穴 出土土器 実測図 [1/4]

環濠は、近年、西山ノ上遺跡等の調査によって検出された弥生時代後期の多重溝の一部である可能性がある。

検出された遺構が極限定的であるため断定は出来ないが、少なくとも可能性の一部としては考えてみたい。出土遺物として、弥生式土器の甕や壺等がある。



第25図 貯蔵穴 出土土器 実測図〔1/4〕

出土遺物

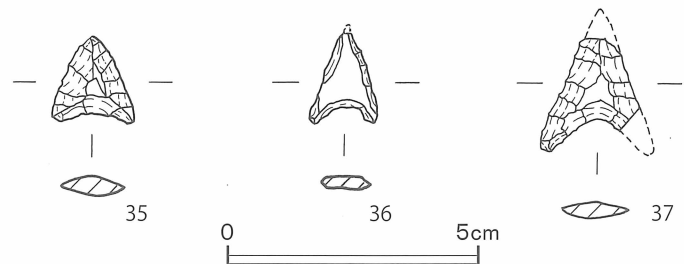
貯蔵穴出土遺物（土器）〈第22～24図〉

1は16号貯蔵穴出土遺物で、如意状口縁を成し、口唇部に密な刻み目が施される。2・3は23号貯蔵穴出土遺物で、2の壺は前期土器に比べ頸部が長く肩は張らない。3はやや深めの鉢で、刻み目はない。4・5は24号貯蔵穴出土遺物で、4は小型の壺。5は端部が開かない直立タイプの器台で、完形品。6～8は33号貯蔵穴出土遺物で、3個体とも甕。6・8は口縁部がやや内傾するタイプで、胴部は直線的に外反する。弥生時代前期末～中期初頭頃の土器群。9は36号貯蔵穴出土土器で、完形品の小型甕で如意状口縁をなす。10～13は37号貯蔵穴出土遺物で、10・11は如意状口縁部の甕であるが、胴

部は卵形に内湾している。12は突帯の付く甕で、口唇部や突帯に浅い刻み目が施される。13は鉢形のミニチュア土器。僅かに口縁部を如意状としている。14は38号貯蔵穴出土遺物で、僅かに突帯を付す甕。中期前半頃の土器。15～19は39号貯蔵穴の出土遺物で、15～17は刻み目を施された甕。18は甕の底部～胴部にかけての破片。19は小型の甕。甕としたが形態的には鉢に近い。口縁部は如意状を成す。20・21は41号貯蔵穴出土遺物で、20は小型の壺。頸部と胴部の境に沈線が入り胴部も張るなどの特徴がある。21の甕の口唇部には刻み目が施される。前期後半の土器群。22は43号貯蔵穴出土遺物で、やや上げ底気味の底部をもつ。中期に属する土器。23～28は45号貯蔵穴出土土器で、23は甕、24は甕の底部破片。25～27は壺の胴部～頸部及び口縁部の破片で、25・27には沈線下に重圈文が見られる。28は小型の壺で、口唇部下に小穴が穿たれており、蓋が付く有蓋壺と思われる。前期後半頃の土器群である。

大濠出土遺物（土器）〈第25図〉

29～34は大濠出土遺物。29・30は甕で29は如意状口縁部を成す。31は壺で、口唇部直下を僅かに肥厚させる。32～34は甕又は壺の底部破片。前期後半頃の土器群。



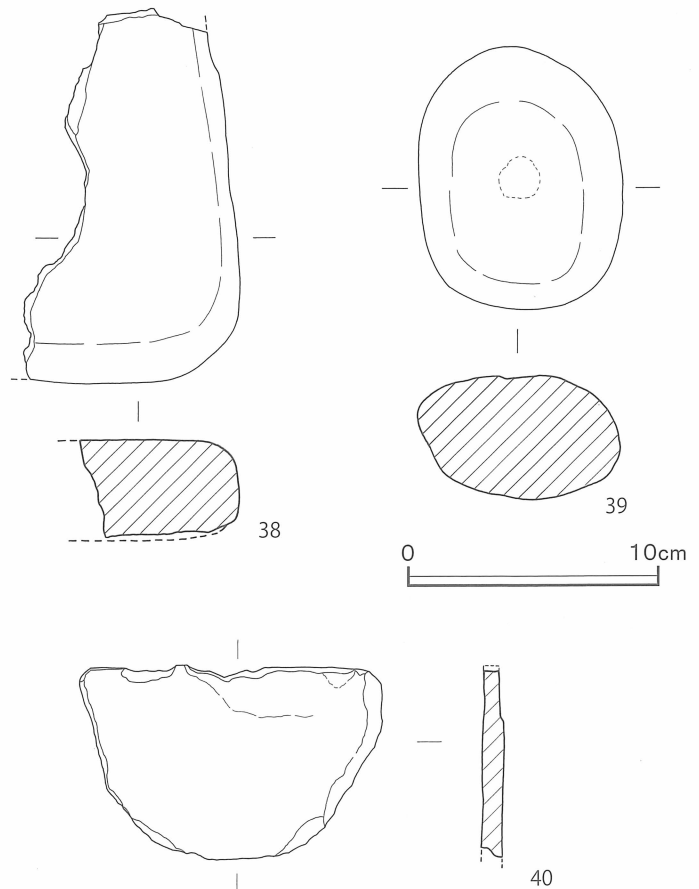
第26図 室岡・山ノ上遺跡2次調査
出土石鏃 実測図〔2/3〕

出土遺物（石器）〈第26・27図〉

35～37はサヌカイト製の石鏃で、35は22号貯蔵穴から出土した。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。36は43号貯蔵穴から出土した。長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測る。37は24号ピット（P-24）から出土した。長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。

38は安山岩製の石皿で、24号貯蔵穴から出土した。最大長14.8cm、最大厚3.8cmを測る。39は自然石の丸石を利用した窪み石で、43号貯蔵穴から出土した。平坦面の片面中央部が敲打により窪んでいる。最大長10.5cm、最大幅8.1cm、最大厚4.9cmを測る。

40は石包丁の未成品で、大濠の第5層下から出土した。背部分を直線的に、刃部を半円形に荒割している。最大長12.0cm、最大幅7.5cm、最大厚0.8cmを測る。



第27図 室岡・山ノ上遺跡2次調査
出土石器 実測図〔1/3〕

〔第3次調査〕

C 3次調査

1) 遺構と出土遺物

竪穴式住居

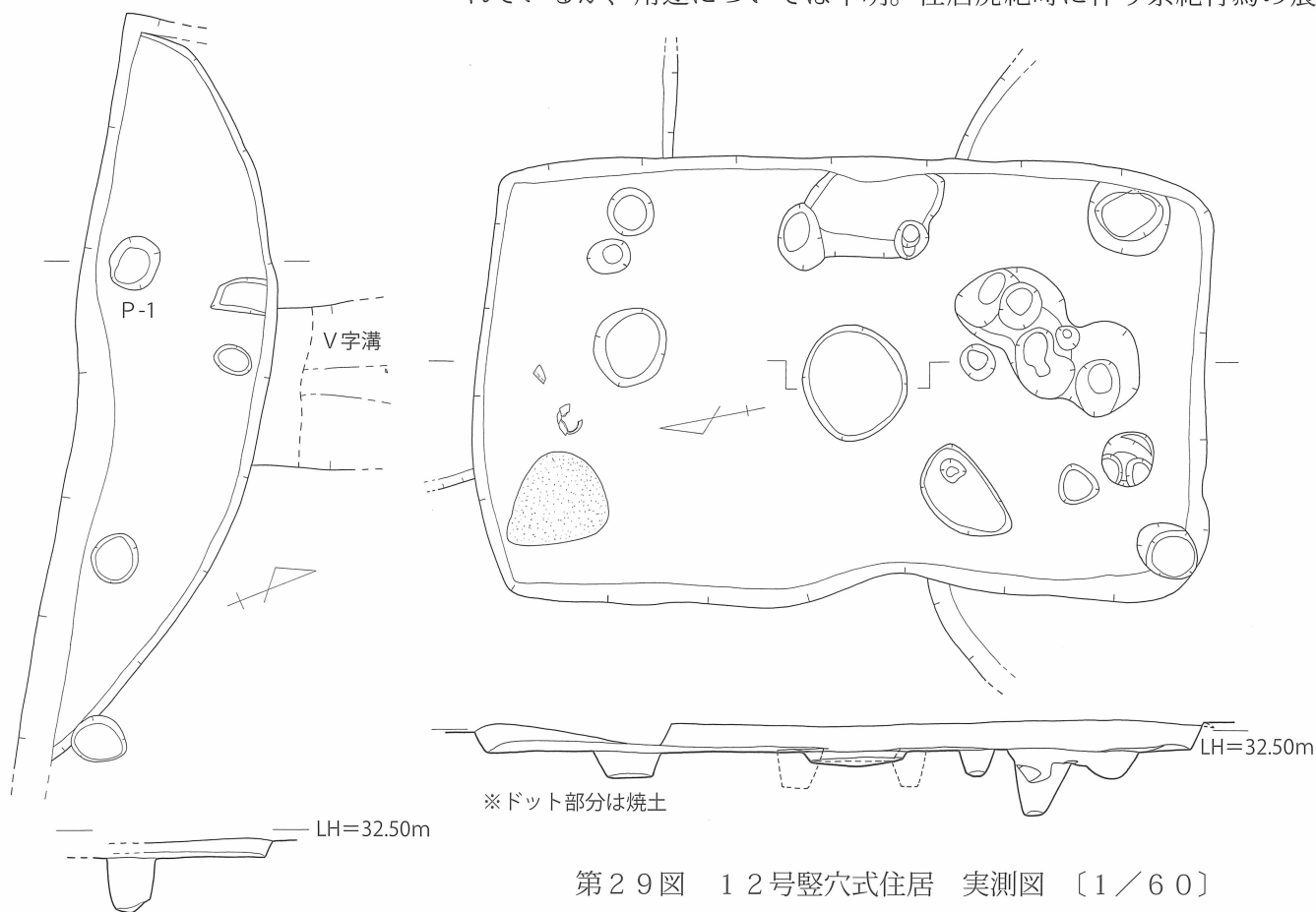
11号竪穴式住居〈第28図〉

調査区南端で検出した円形、又は、隅丸方形プランの竪穴式住居である。V字溝を切る。判明している規模は東西方向で5.96m、南北方向で1.5mを測る。主柱穴についての詳細は不明であるが、南端にやや深いピット（P-1）があり、これが主柱穴の1つであると考えられる。弥生時代前期後半頃に掘削されたV字溝が完全埋没した後に掘削されていることから、少なくとも中期前半以降に営まれた住居であると考えられる。図示はしていないが、弥生土器細片が出土している。

12号竪穴式住居〈第29図〉

調査区中央付近で検出した長方形プランを呈する竪穴式住居である。円形住居である13・14号竪穴式住居を切っている。長軸方位をN-11°-Eに取る。規模は5.94m×3.66m、深さ0.25mを測る。主柱穴はP-2・3・4が該当するものと考えられるが、やや位置関係が不安定である。P-3・4の状況から最低1回の建て替えが行われているものと思われる。東側壁面中央に屋内土壌があり、その両袖には直径30～40cmの小穴があるが、これは筑後地区の竪穴式住居で一般的に見られる形態である。

北西隅の床面からは直径約70cm、厚さ約10cmの焼土塊が検出されているが、用途については不明。住居廃絶時に伴う祭祀行為の痕



第28図 11号竪穴式住居
実測図 [1/60]

第29図 12号竪穴式住居 実測図 [1/60]

0 2m

跡とも考えられる。

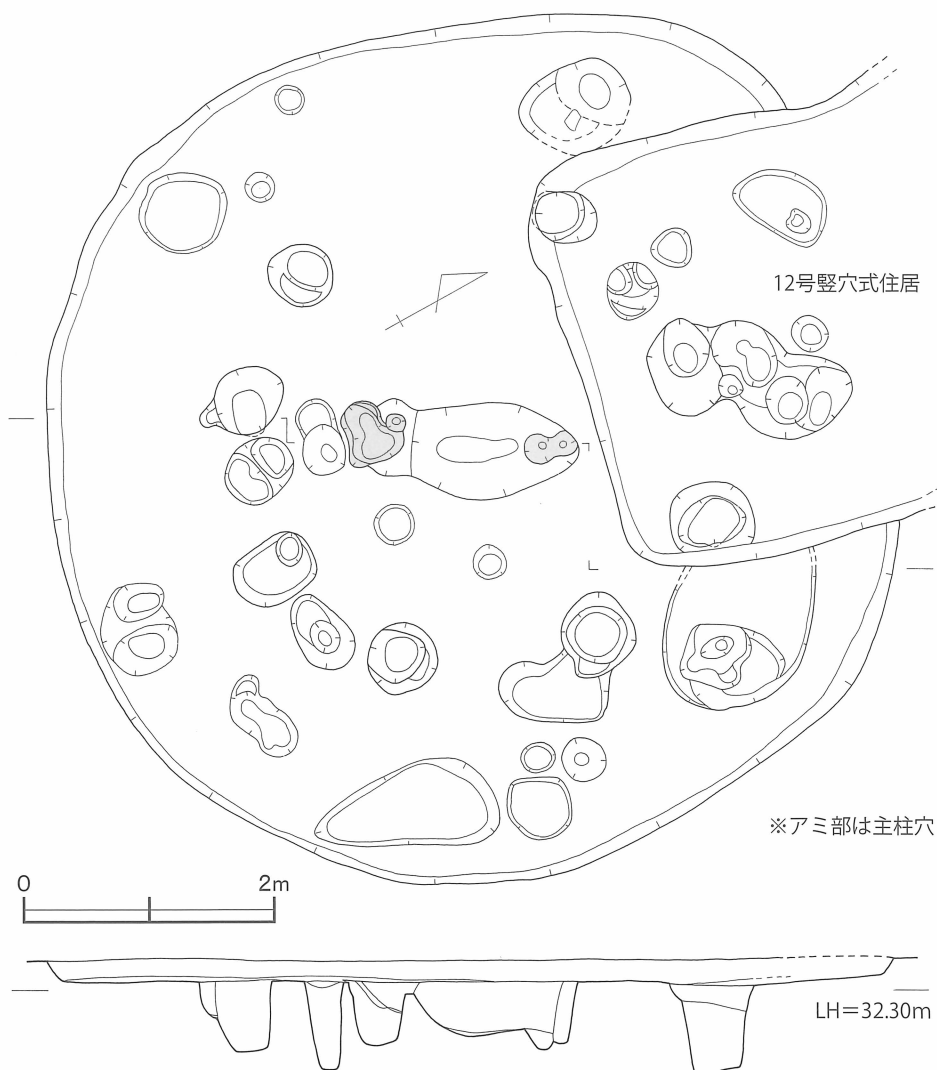
出土遺物として、弥生式土器の鉢等がある。弥生時代後期のものと思われる。

13号竪穴式住居

〈第30図〉

調査区中央付近で検出した円形プランを呈する竪穴式住居である。長方形住居である12号竪穴式住居に切られている。規模は直径6.8m、深さ0.2mを測る。支柱穴は基本的には8本である。床面からの深さは70cm前後と比較的深く、しっかりとした基礎が作られている。支柱の取り替え等については判然としない。住居中央部に長円形の中央土壌が見られるが、その両端に25～50cm程の小穴が穿たれており、本住居が多支柱円形松菊里系住居である事が分かる。

出土遺物として、弥生式土器の甕等の破片がある。弥生時代前期後半～中期前半頃のものと思われる。

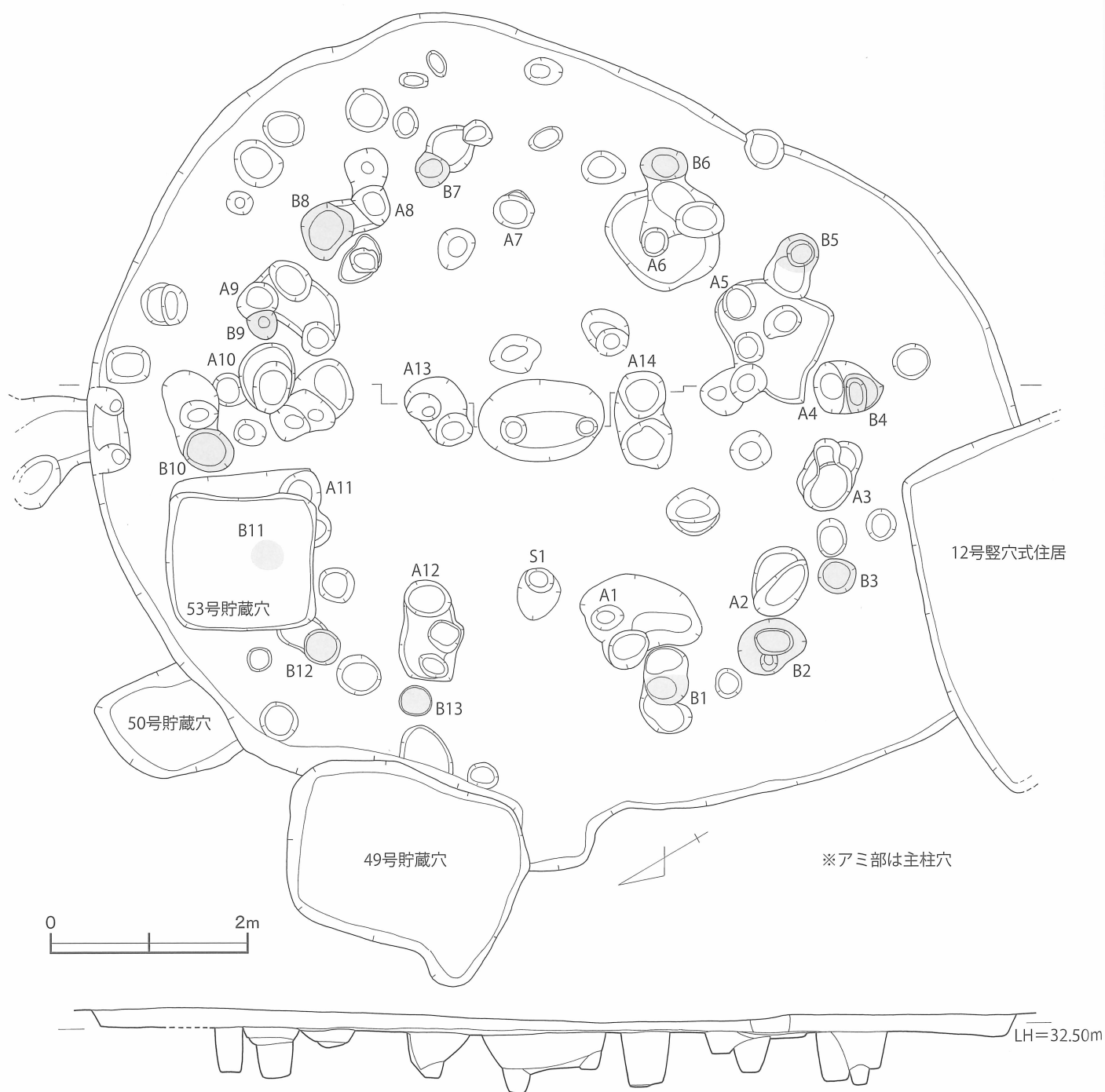


第30図 13号竪穴式住居 実測図 [1/60]

14号竪穴式住居 〈第31図〉

調査区中央付近で検出した楕円形プランを呈する竪穴式住居である。長方形住居である12号竪穴式住居や49号貯蔵穴に切られている。規模は直径7.9m～9.4m、深さ0.2mを測る。建物の立て替えは少なくとも1回行われており、前半をA期、後半をB期とすると、A期の支柱穴は基本的には12本となり、中央土壌寄りの2本を合わせると計14本となる。B期における支柱穴は中央土壌寄りの2本、及び、49号貯蔵穴により判然としない1本を合わせると計15本となる。支柱の取り替えについては各時期複数本の柱について行われている。各支柱穴とも床面からの深さは60cm前後と比較的深く、13号竪穴式住居と同様、しっかりとした基礎が作られている。

住居中央部に深さ40cmを測る長円形の中央土壌が見られるが、その両端に直径10～15cm程の小穴が穿たれている事から、本住居も13号竪穴式住居と同様、多支柱円形松菊里系住居である事が分かる。また、A1とA12の間に掘削角度を大きく斜角にとり、支柱穴に匹敵する深さのピットが存在するが(S



第31図 14号竪穴式住居 実測図 [1/60]

1)、このS1から北西壁側には2m×2m程のスペースがとられており、又、A1とA12、B1とB13の主柱穴は意図的にこのスペースを空けた配置状況を呈している事から、S1は住居内への昇降用ピットと判断した。

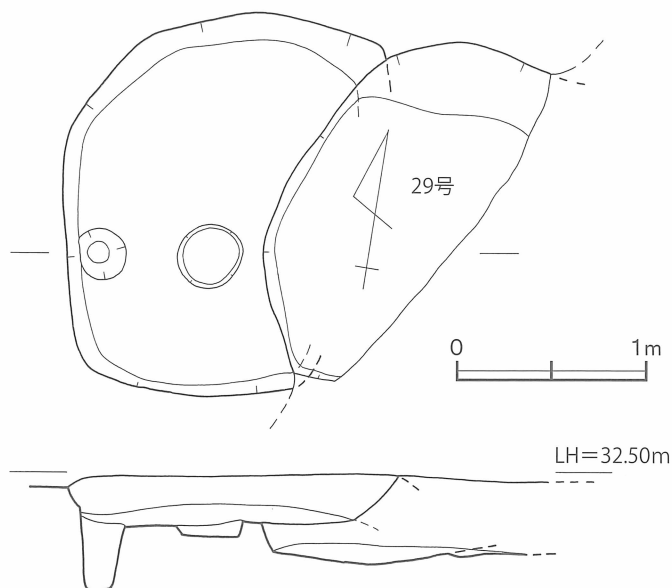
本住居については、A期からB期にかけて主柱穴により囲まれた部分の面積が増大しているが、これは住居面積の拡大を意図したものと考えられる。また、この折西側壁面の掘り直しも行われており、A期の主柱列からは大きく空間が空くようになっている。

出土遺物として、弥生式土器の甕の破片や石鏃等の石製品がある。弥生時代中期前半頃のものと思われる。

貯蔵穴

46号貯蔵穴〈第32図〉

調査区南東端で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-11^{\circ}-W$ に取る。規模は $2.0m \times 1.73m$ 、深さ $0.3m$ を測る。29号貯蔵穴に切られており、貯蔵穴群の中では古い時期に属するものと考えられる。西壁に接するように深さ約 $40cm$ の小穴が穿たれているが、これが昇降用の梯子をかけるための穴か否かは不明。



第32図 46号貯蔵穴 実測図〔1/40〕

47号貯蔵穴〈第33図〉

調査区南東端で検出した円形と思われる貯蔵穴である。規模は現状で $1.13m \times 0.4m$ 以上、深さ $0.33m$ を測る。遺構の大半が調査区外にあるため、詳細は不明である。

48号貯蔵穴〈第33図〉

調査区北側で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-21^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.6m \times 1.2m$ 、深さ $0.38m$ を測る。出土遺物として、弥生式土器の甕等の破片がある。

49号貯蔵穴〈第33図〉

調査区西側中央付近で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。14号竪穴式住居の一部を切っている。長軸方位を $N-50^{\circ}-E$ に取る。規模は $2.5m \times 1.82m$ 、深さ $0.32m$ を測る。

50号貯蔵穴〈第33図〉

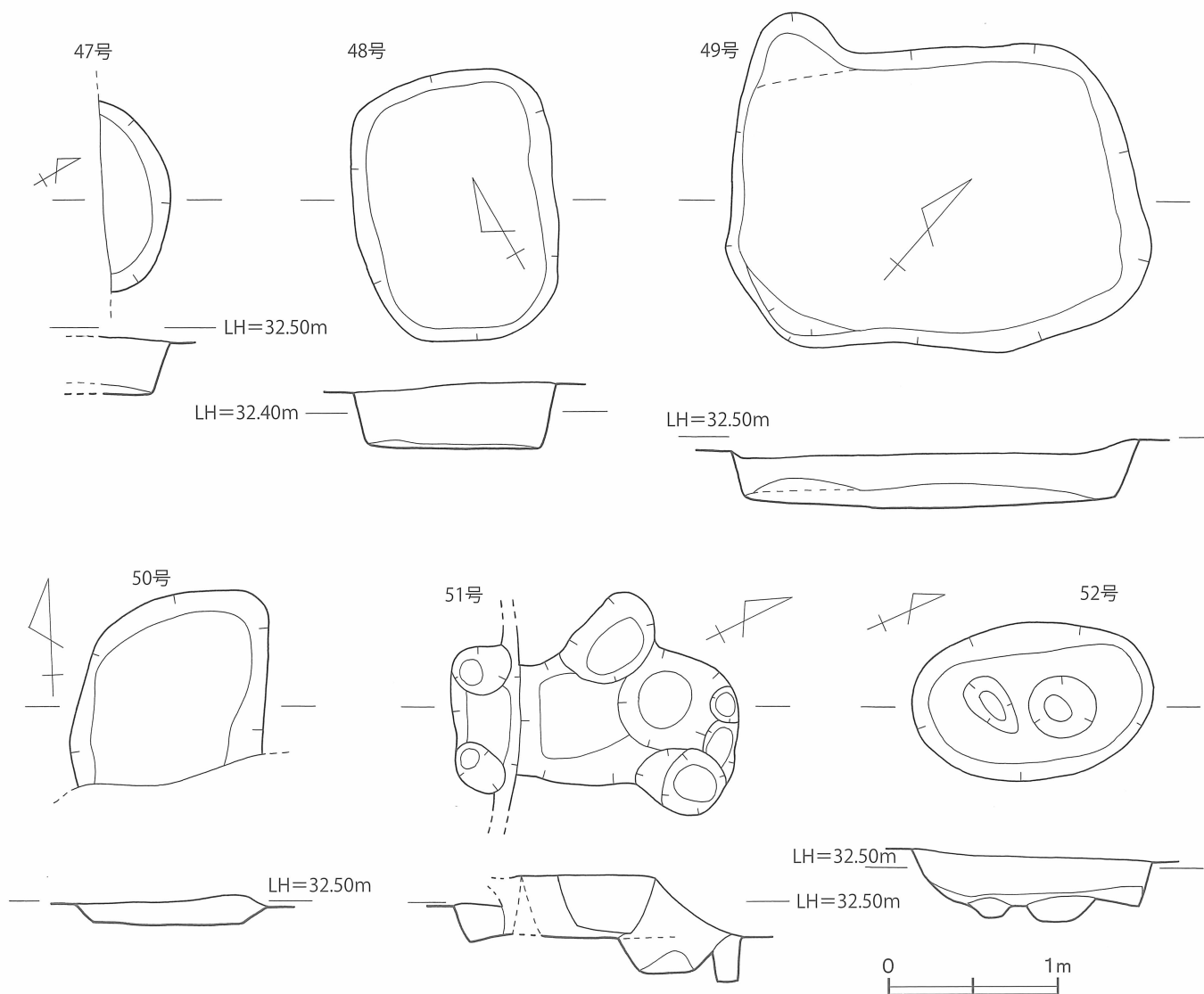
調査区西側中央付近で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。14号竪穴式住居に切られる。長軸方位を $N-5^{\circ}-E$ に取る。規模は現状で $1.18m \times 1.14m$ 、深さ $0.16m$ を測る。出土遺物として、弥生式土器の甕の破片等がある。

51号貯蔵穴〈第33図〉

調査区北側で検出した隅丸長方形の貯蔵穴である。一部を14号竪穴式住居によって切られている。長軸方位を $N-25^{\circ}-E$ に取る。多数のピットに切られており規模は判然としないが、現状で深さ $0.36m$ を測る。出土遺物として弥生式土器の小型鉢等がある。

52号貯蔵穴〈第33図〉

調査区北端で検出した楕円形の貯蔵穴である。長軸方位を $N-24^{\circ}-E$ に取る。規模は $1.43m \times 0.93m$ 、深さ $0.28m$ を測る。底面にある2穴についての機能は不明。出土遺物として、弥生式土器の甕等の破片がある。



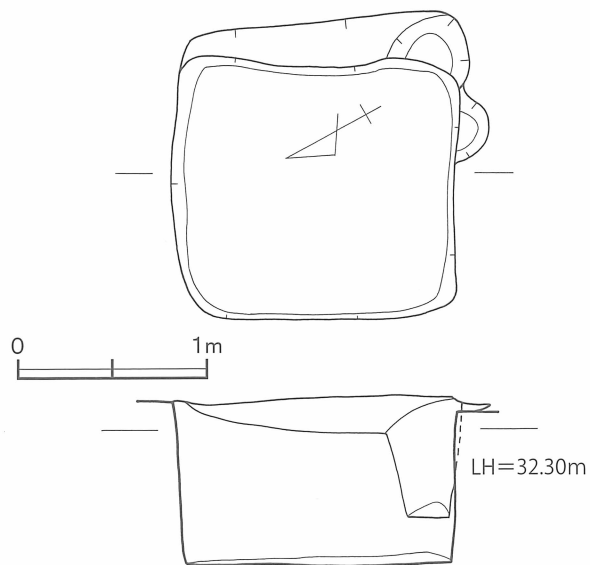
第33図 47～52号貯蔵穴 実測図 [1/40]

53号貯蔵穴〈第34図〉

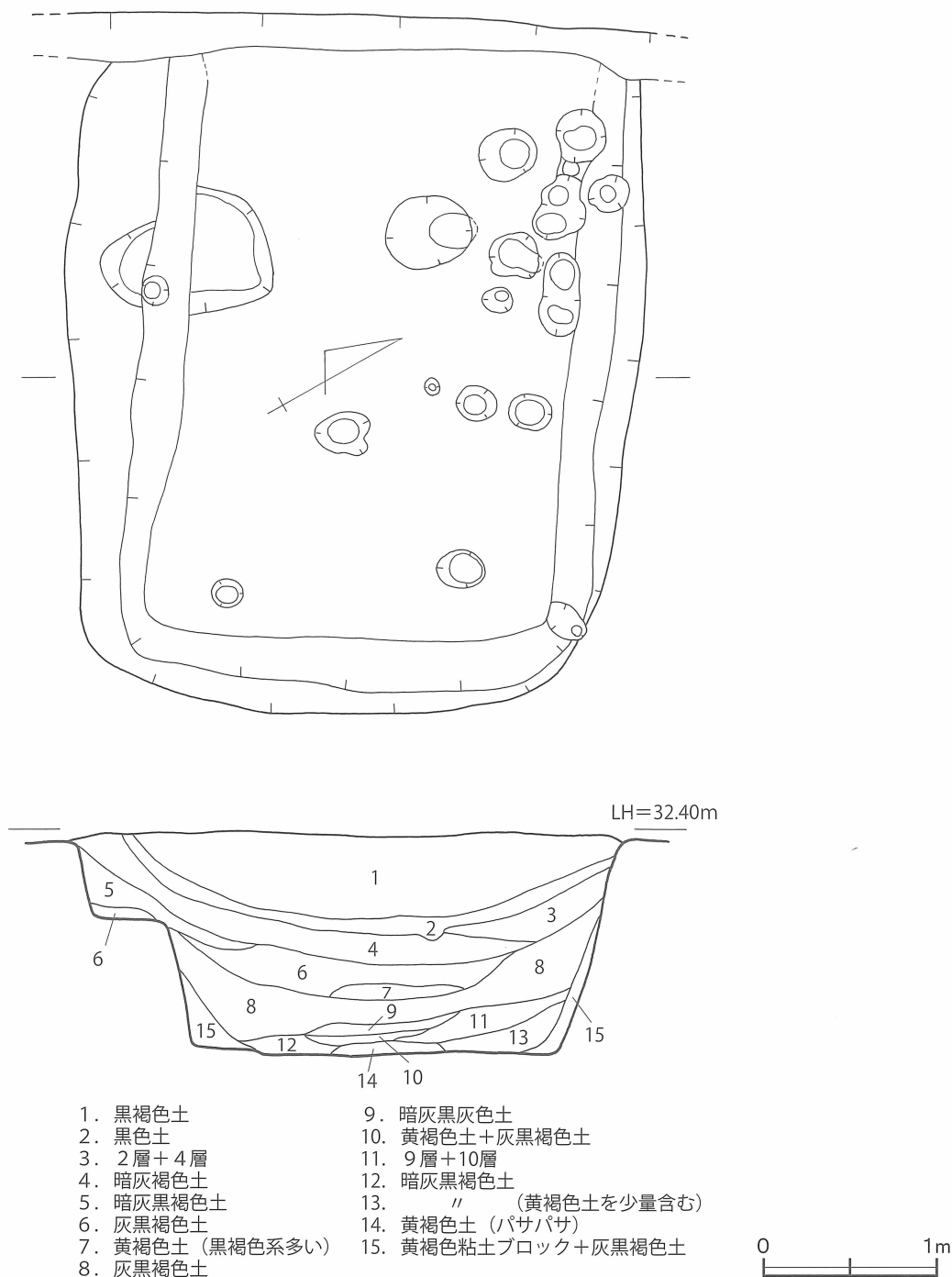
調査区南北側で検出した方形の貯蔵穴である。14号竪穴式住居を切る。長軸方位をN-61°-Wに取る。規模は1.52m×1.48m、深さ0.89mを測る。南側壁面にある柱穴痕は竪穴式住居の支柱穴の一部である。

54号貯蔵穴〈第35図〉

調査区北東端で検出した長方形の貯蔵穴である。長軸方位をN-60°-Wに取る。一部が調査区外に延びており全体像は不明であるが、現状で規模は3.86m以上×3.36m、深さ1.27mを測る。貯蔵穴としては非常に規模が大きく、また、残存する深さも2次・3次調査を通し最大である。断面形におい



第34図 53号貯蔵穴 実測図 [1/40]



第35図 54号貯蔵穴 実測図 [1/40]

ては逆台形を呈しており、貯蔵穴としては異質であり、底面に多数穿たれている小穴についても不自然な点が多い事から、弥生時代後期の環濠の一部である事も考慮すべきと思われる。ただ、環濠として考える場合、対応する溝が2次調査においても検出されておらず、現状で考えるとあまりにも広い陸橋となるため、慎重な判断が必要である。出土遺物として、弥生式土器の甕や石製紡錘車等がある。

V字溝〈第3・36・37図〉

調査区の西辺を沿うように、ほぼ南北方向に延びた断面V字の溝である。検出全長18m、平均検出幅2.3m、深さ約1.8m、溝底部幅約0.6mを測る。溝は南側で二股方向に分かれ共に溝底部幅を減じている事から、Y字部分を起点として北方向部分が本線、西・南方向部分は支線と考えられる。南側支線につい

ては、検出面での幅 1.3m、深さ 1.5m、溝底部幅約 0.2m を測り、本線と比較し明確に規模が縮小している。本線とは異なる掘削状況を呈すところから、最小限の労働力で最大限の効果を考慮しているようである。単純に考えれば、この現象は本線掘削が労働単位の共同作業、支線掘削は単体作業である結果とも考えられるが、周辺の遺構配置状況も鑑みつつ、これが妥当であれば V 字溝掘削の本来の目的は貯蔵穴群の区画であり、掘削幅や深さを考えると小動物から貯蔵物を守るものであったと考えられる。

出土遺物として、弥生時代前期後半頃～中期初頭頃の土器や石斧、石包丁、石鏃、石剣等が堆積土中から出土している。特に石剣は刃部両面に赤色顔料を塗布していた痕跡がある。

出土遺物

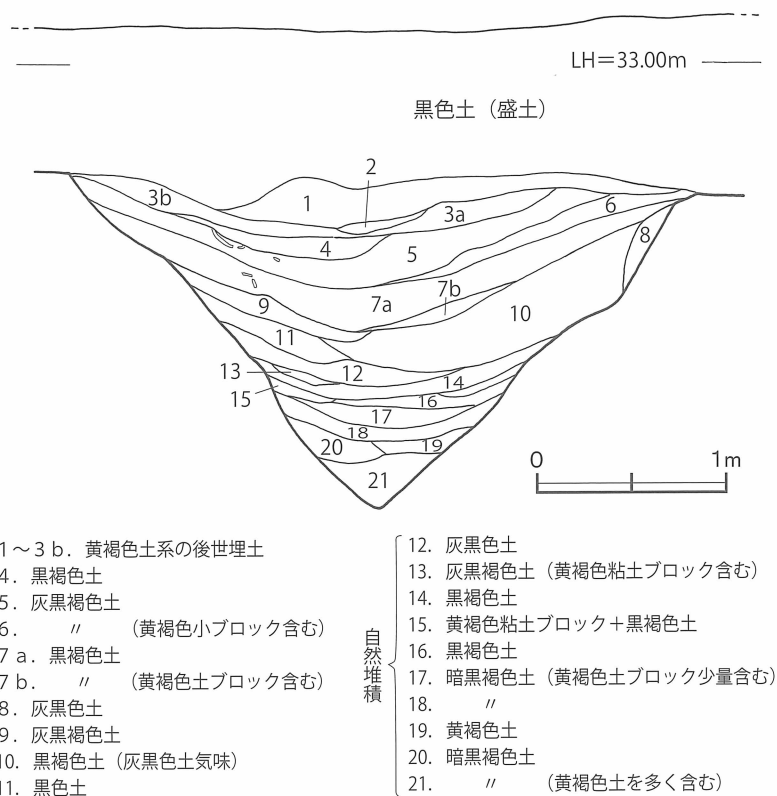
V 字溝出土遺物（土器）

〈第 38・39 図〉

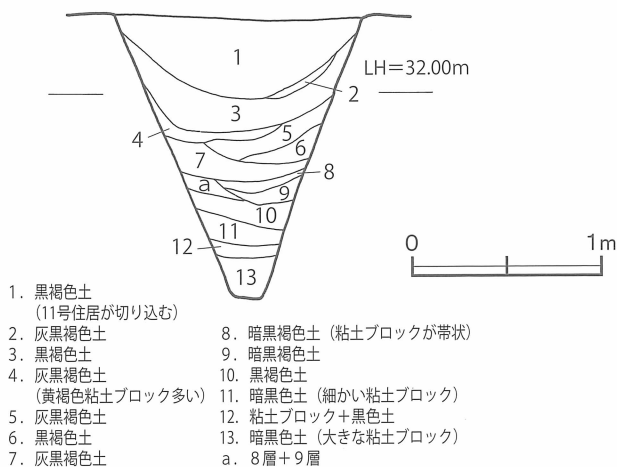
41～47 は V 字溝上層出土遺物

で、41～43 の甕は口縁部から胴部突帯の間隔が狭く、刻目も浅いことからやや新しい時期の特徴を持つ。44 の壺は頸部と胴部境が不明瞭になりつつあり、沈線も退化傾向にある。45・46 は器台で、47 は土製の紡錘車で最大径 3.8cm、厚さ 1.5cm を測る。

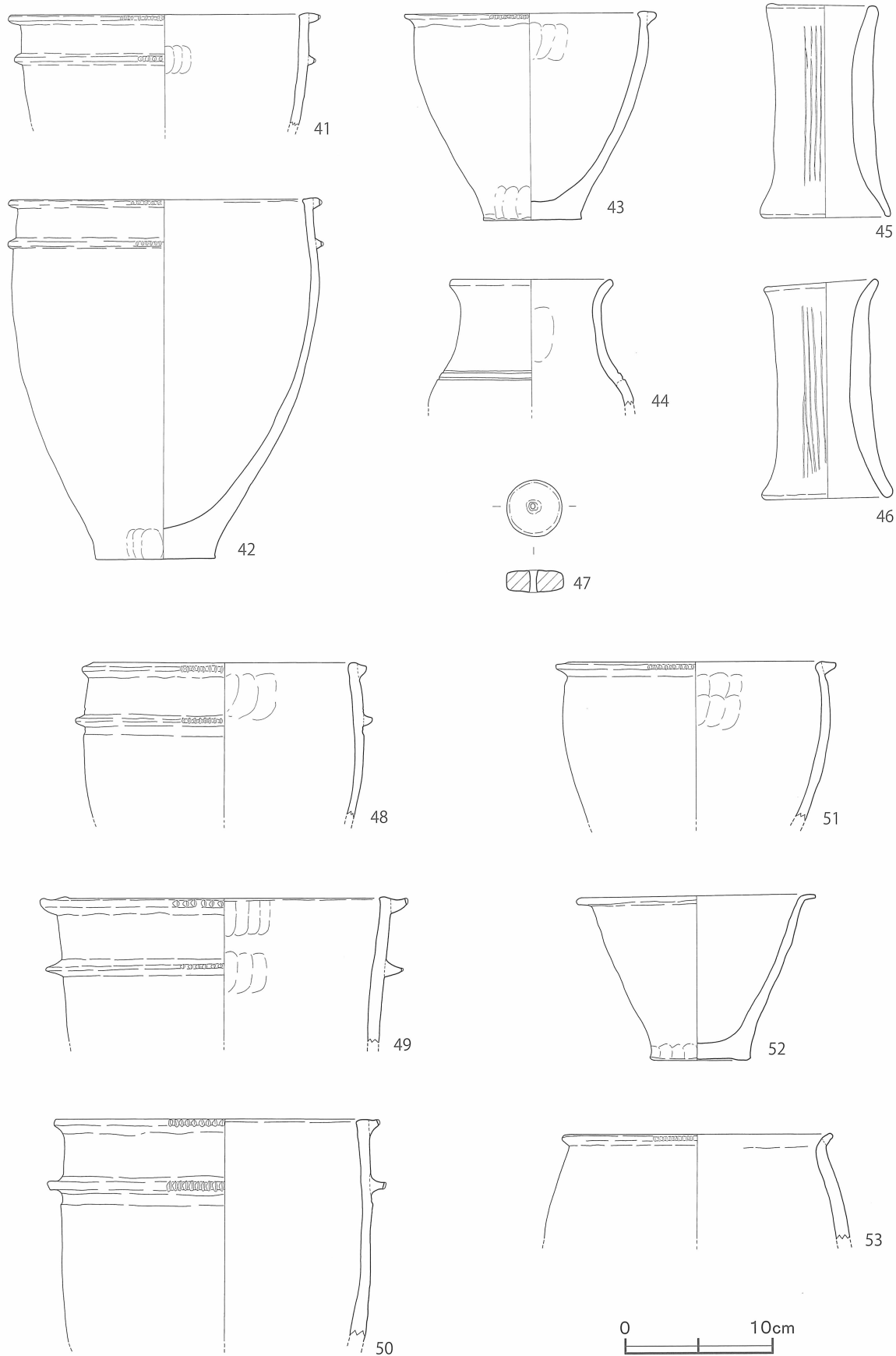
48～70 は V 字溝中層（67 は下層）出土遺物で、48～53 は甕の破片。直線的な胴部を持つものが含まれ、突帯部分も高く刻目もやや深いことから、上層出土遺物よりやや古相を示している。52・53 の口縁部は如意形となっている。口唇部付近を薄手に形成するなど、やや特徴的である。54～56 は壺の破片で、頸部はやや内傾しつつ直線気味に口縁部に向かい延びる。57～60 は鉢で、58 の外底部は若干上げ底となっている。60 は直口縁を成している。61 は高坏。脚部が極端に短く、脚端部分に突帯状の貼付を行い頸部突帯と共に非常に細い刻目を施すなど、大きな特徴を有している。62 は器台で、胴部中央の小穴は貫通している。上端部には被熱痕が見られる。63～65 は土製紡錘車で、直径は 4.1cm



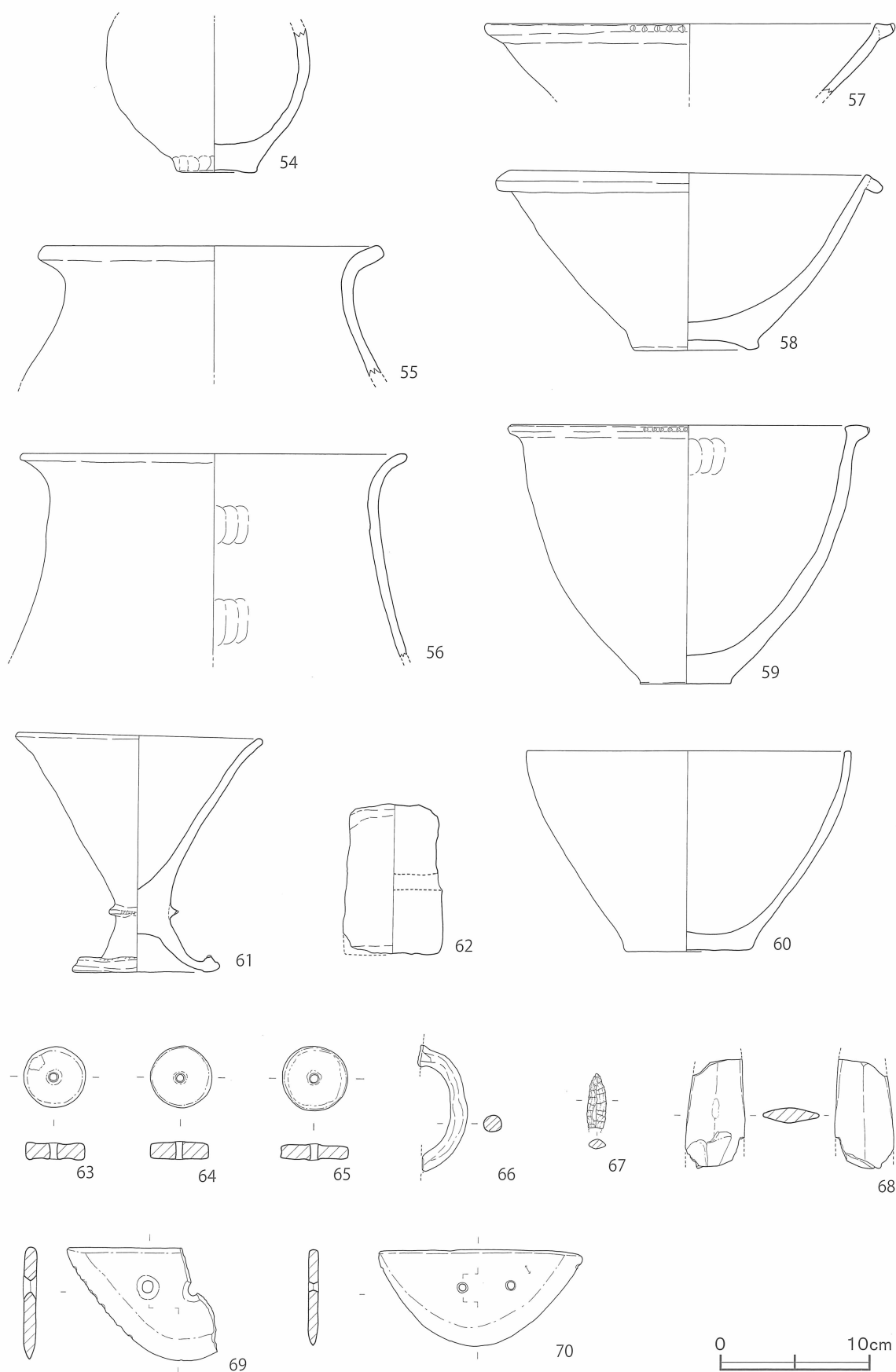
第 36 図 V 字溝西壁土層断面 実測図 [1/40]



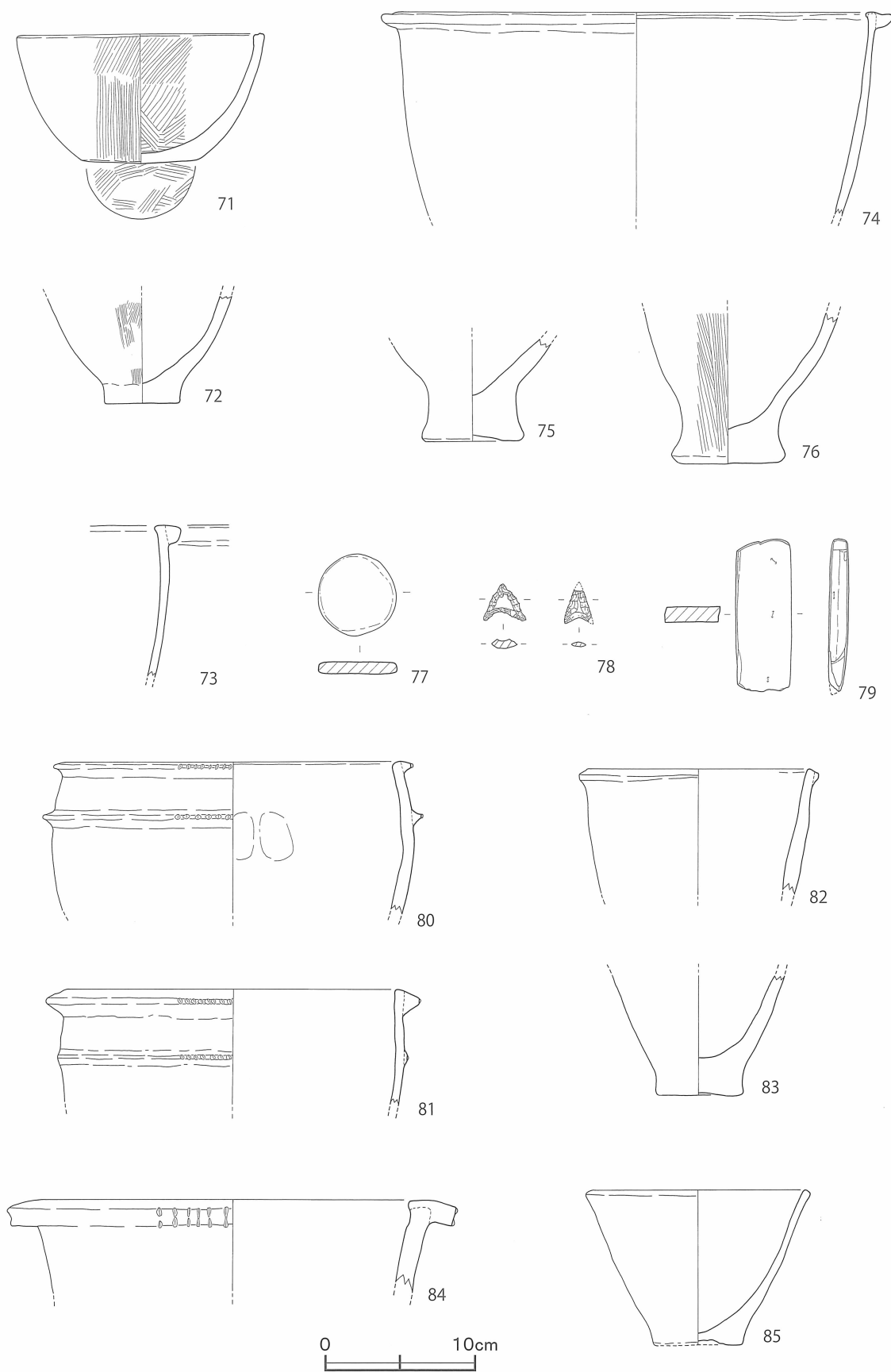
第 37 図 V 字溝南壁土層断面 実測図 [1/40]



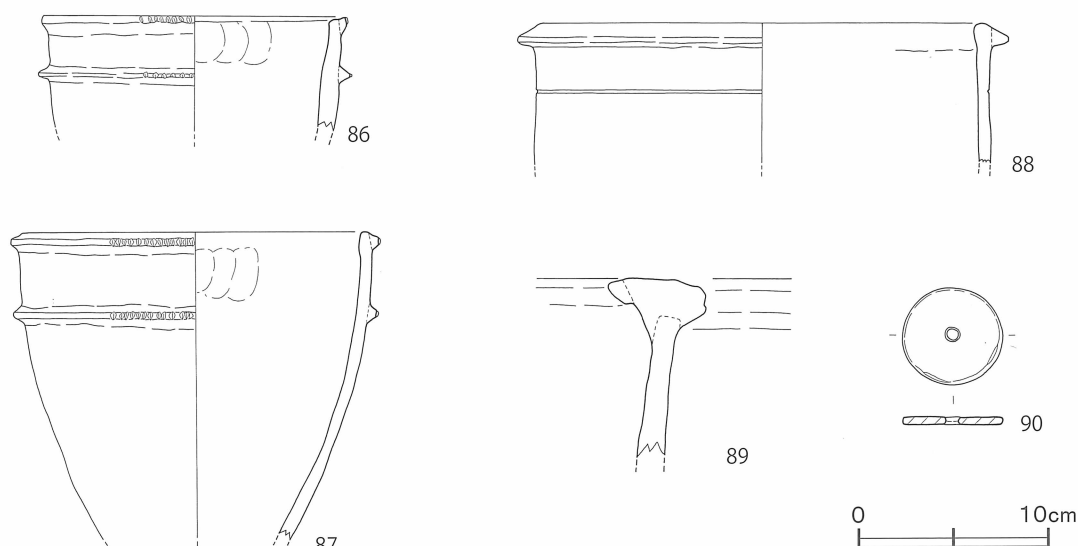
第38図 V字溝出土遺物実測図 (41~47は上層、48~53は中層) [1/4]



第39図 V字溝出土遺物実測図 (67は下層、他は中層) [1/4]



第40図 竪穴式住居及び貯蔵穴 出土遺物実測図 [1/4]



第41図 貯蔵穴 出土遺物実測図〔1／4〕

～4.4cm、厚さ1.1cm～1.2cmを測る。66はジョッキ形土器の把手と思われる破片。

67はサヌカイト製の石鏃で、長さ3.7cm、幅1.3cm、厚さ0.7cmを測る。68は粘板岩製の石剣破片で、上端付近に赤色顔料が遺存している。69・70は石包丁で、69は粘板岩製、70は蛇文岩製。

竪穴式住居出土遺物〈第40図〉

71は12号竪穴式住居から出土した鉢。外底部も含め全体に刷毛調整を施している。後期中頃の所産と思われる。

72は13号竪穴式住居から出土した甕底部破片。中期前半頃のものか。

73～79は14号竪穴式住居から出土した遺物で、73～76は甕の破片。胴部突帯や沈線、口唇部刻目が消え、底部も大きく上底になっていることから、中期前半以降の土器群と思われる。77は結晶片岩製の円盤で、直径5.4cm、厚さ0.8cmを測る。78の2個体の石鏃は共にサヌカイト製で、左側は剥片鏃であり長さ2.5cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmを測る。右側は長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。79は粘板岩製の扁平片刃石斧で、刃部の一部が欠損している。

貯蔵穴出土遺物〈第40・41図〉

80～83は48号貯蔵穴出土遺物で、甕の破片。中期前半頃を中心とした土器群である。

84は50号貯蔵穴出土遺物で、甕または鉢の口縁部破片。鋤先状口縁を指向しており、中期中頃から中期後半手前頃の所産と思われる。遺構本体の切り合い関係とは逆の様相を呈しており、混入品と思われる。

85は51号貯蔵穴出土遺物で、鉢の完存品。

86・87は52号貯蔵穴出土遺物で、甕の口縁部～胴部破片。前期末～中期初頭頃の所産か。

88～90は54号貯蔵穴出土遺物で、88・89は甕の口縁部破片。89は鋤先状を呈している。90は結晶片岩製の有孔円盤で、直径5.3cm、厚さ0.4cmを測る。

4 まとめ

室岡遺跡群は、弥生時代前期後半から後期後半頃までの遺構が中心を成す典型的な弥生遺跡群である。その調査履歴は古く、昭和37年には南側に隣接する亀ノ甲遺跡が個人や大学関係者の尽力により調査が行われ、弥生時代前期の環濠や後期の墳墓群が確認された。特に前者においては、稲作開始後間もなく八女地方にも環濠の造営を含む稲作文化の定着が確認出来た事は、非常に大きな成果であった。また、環濠内からは多量の刻目突帯文土器が出土し、現在では「亀ノ甲タイプ」土器として八女地方の弥生時代前期における土器群の指標となっている。

本調査は、亀ノ甲遺跡以来の学術的な発掘調査であり、多数の貯蔵穴を検出するなど大きな成果があったものの、調査区域が限定的であった事もあり、室岡遺跡群の全容解明には至っていなかった。しかしながら、平成13年の西山ノ上遺跡の発掘調査や平成14年から始まった国道442号線バイパス建設事業に係る発掘調査における成果は、弥生時代全般にわたる室岡台地上での変遷を掴むための大きな示唆を示してくれた。

室岡・山ノ上遺跡2次・3次調査が行われた当時では判然としなかった事柄についても、報告を行っている今現在では推定が可能な段階にきている。本書では過去の調査実績と近年の実績を噛み合わせた上で、本遺跡についての評価を行いたいと思う。

1 貯蔵穴群概観

検出された貯蔵穴の総数は40基を数える。これは概要報告の内容とは異なり、各遺構を再精査した結果、21号貯蔵穴を認定から外し12号土壌を新たに貯蔵穴と認定したものである。また、概要報告の中で54号貯蔵穴となっている遺構については環濠の一部である可能性も高く、これを除外すれば39基となる。

貯蔵穴群は各遺構の長軸方向（円形プランの個体は除く）によって、以下の3群に大別可能である。

A群：長軸方向が磁北に対し平行方向に向く1群

（22～26、28、30、32、33、37、46、50、52号）

B群：長軸方向が磁北に対し直交方向に向く1群

（15、17～21、29、45号）

C群：長軸方向が磁北に対し斜角方向に向く1群

（16、27、31、35、36、38～44、48、49、51、53、54号）

A群

A群は調査区の南半分に集中域を持つが、その中でも南端の1群（22～26、30、46号）をA1群、中央寄りの1群（28、32、33、37号）をA2群とした。これは空間的な分布とともに、断面構造から判断したものである。両群ともその約半分が検出面からの深さ50cm前後の比較的深みのあるものを含んでおり、A1群の前後関係をみると浅いタイプの貯蔵穴が深いタイプを切り込むと同時に、また同様の密集性を保持するところから、同一系列の集団が時期を前後し、それぞれの支群を構成している事が推定できる。A2群には検出時の切り合い関係は見られないが、A1群と同様の支群構成を成しているものと思われる。

B 群

B 群は前述の A 1 群を取り囲むように配置された 1 群である。2 9 号貯蔵穴が A 1 群の 4 6 号貯蔵穴を切り込んでいるが、基本的には A 1 群に寄り添いつつも一定の距離を保っている。

特筆すべきは半地下式の通路状の施設を持つ19、20号貯蔵穴である。19号貯蔵穴は、その形状から隅丸方形プラン→円形プランへの過渡期を示すものと思われ、また、同時期に併存・機能していたと思われる中で、あえて形状や深さを異なるものとしたのは、貯蔵穴の形状差が内包する貯蔵物の差として現れているものと考えたい。

また、調査区中央東端部に 4 5 号貯蔵穴があるが、これより以東は土取り工事により削平され判然としませんが、B 2 群としても良い支群が存在していた可能性は残る。

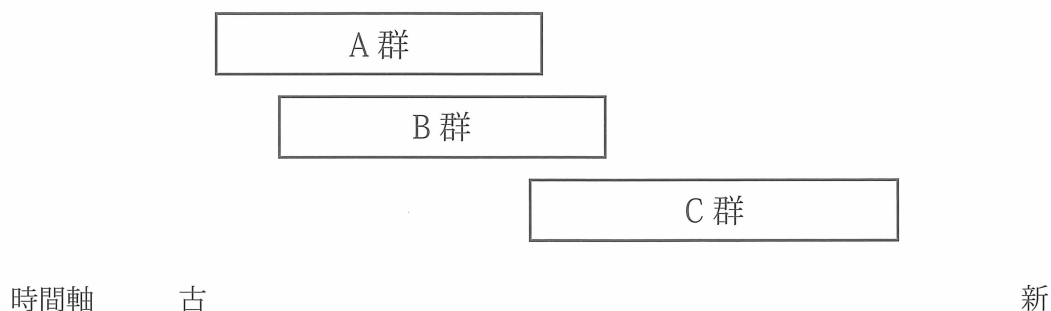
C 群

C 群は調査区の北半分に集中域を持つが、その中でも北東の 1 群（3 8～4 4 号）を C 1 群、北西の 1 群（4 8～5 4 号）を C 2 群、中央寄りの 1 群（1 6、3 1、3 5、3 6 号）を C 3 群とした。A 1 群と同様、空間的な分布とともに断面構造から判断したものである。各群とも 1 基または 2 基の、検出面からの深さが 8 0 cm を超える非常に深い規模を持つものを含んでおり、周囲には 4 基前後の比較的浅い貯蔵穴を伴いつつ支群を構成している。A・B 群には存在しなかった極端に深い構造の貯蔵穴の出現は、更なる機能分化が進んだ結果と思われる。

なお、34号貯蔵穴に関しては、その規模からC3群の最終段階にあたる貯蔵穴として考えたい。

2 貯蔵穴群の時間的変遷

前述した A ～ C 群について、配置的側面や切り合い関係、出土土器の観察等から以下のような時間的変遷が概念的に追える。



しかしながら、出土土器間には明確な時期差はそれほど見られないことから、A 群から C 群までの変遷には大きな時間差は存在しないと考えられる。強いて言うならば、A・B 群は弥生時代前期後半から末頃に、C 群は前期末頃から中期前半にかけての時間軸が与えられるものとする。

3 空間使用の様相

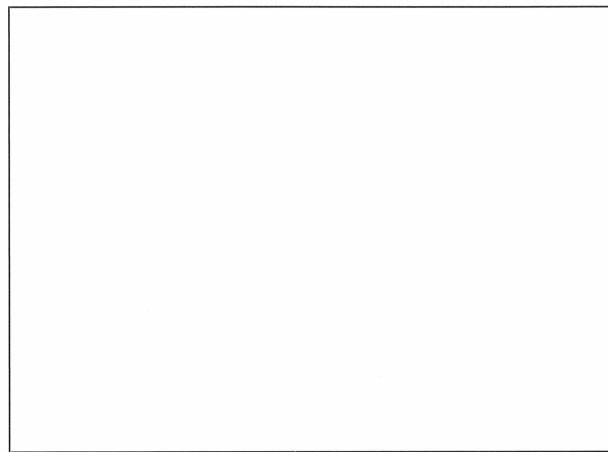
室岡山ノ上遺跡 2・3 次調査区を概観すると、東壁沿いに 1 条（分岐分も入れると 2 条）、南東隅に 1 条の V 字溝があり、それら溝の間にある空間中に貯蔵穴や竪穴式住居が配される状況を呈している。V 字溝は深さ 1.8m と深度は十分であるが、幅については 1.5m ～ 2.3m とやや狭く、後期に盛行する外敵対

策としての防御溝とは考えにくい。近接した周辺遺跡を見ると、室岡山ノ上遺跡 1 次調査においては南端の大溝以北～北端の V 字溝までの空間に貯蔵穴の大半が集中的に構築されており、また、大溝以南の遺跡である亀ノ甲遺跡や北小路遺跡では住居跡や墳墓群が中心となっていることから、V 字溝や大溝に囲まれている区域は基本的に貯蔵穴専用区域と考えられる。この場合の V 字溝や大溝は福岡県福岡市所在の板付遺跡内濠内にある貯蔵穴区域区画用の弦状濠と同様の機能が考えられ、玄界灘方面からは稲作文化と共に、環濠を構築するだけでなく環濠内部の機能面についての考え方もダイレクトに伝播している事を示す興味深い事実である。また、12号～14号竪穴式住居が占有する区域には C 群の一部にしか貯蔵穴は進入していない。これは貯蔵穴築造前から計画的に空間が空けられていたようで、竪穴式住居からの出土土器が中期前半頃を示す事を考えると、前期後半頃に与えられていたこの空間が有する当初の意味付けが失われた後、竪穴式住居が建てられたと思われる。この空間は貯蔵穴 A～C 群の共有空間（いわゆる「共同広場」）であったと考えて良いと思うが、C 群の一部が 14 号竪穴式住居を切り込む点や、住居が占有する空間については、後々も貯蔵穴が殆ど入ってこない点については、注意を要する。

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号



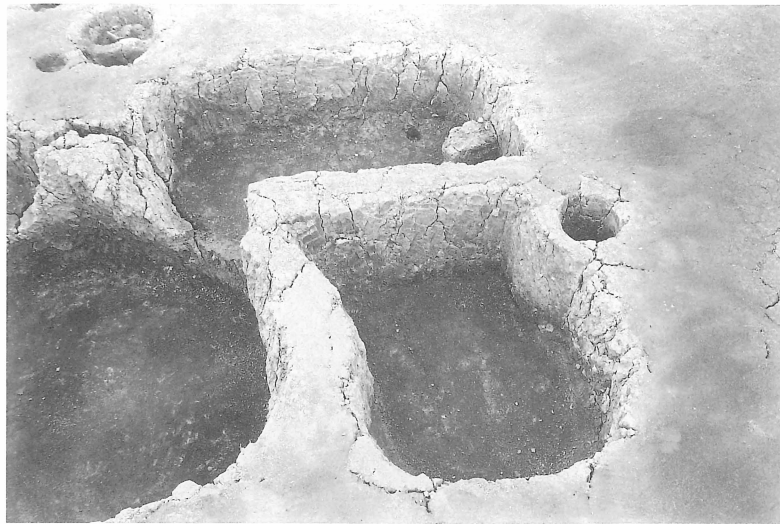
(1) 2次調査全景（北より）



(2) 大濠断面検出時



(3) 大濠掘削後 断面



(1) 33・34号貯蔵穴



(2) 43号貯蔵穴



(3) 2次 中世溝 (北東より)



(1) 3次調査 遺構検出



(2) 3次調査全景 (北より)



(3) 3次調査全景 (南より)



(1) 12・13号竪穴式住居



(2) 14号竪穴式住居



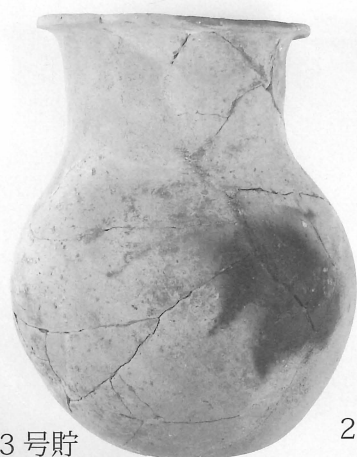
(3) V字溝断面

PL 5



16 号貯

1



23 号貯

2



23 号貯

3



24 号貯

4



24 号貯

5



33 号貯

6



33 号貯

8



36 号貯

9



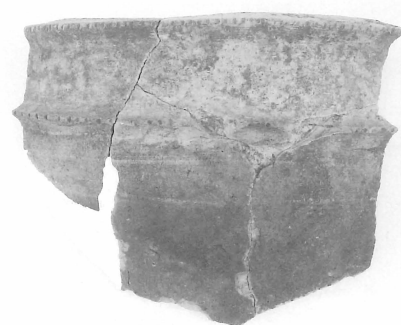
37 号貯

10



37 号貯

11



37 号貯

12



38 号貯

14



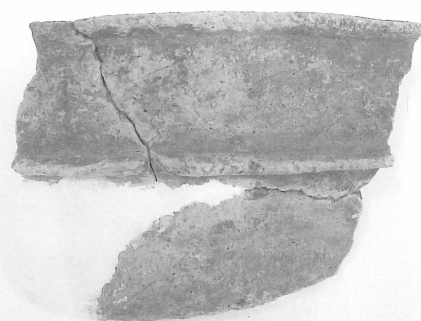
39 号貯

15



39 号貯

16



39 号貯

17



39 号貯

18



39 号貯

19



41 号貯

20



43 号貯

22



46 号貯

23



46 号貯

24



46 号貯

25



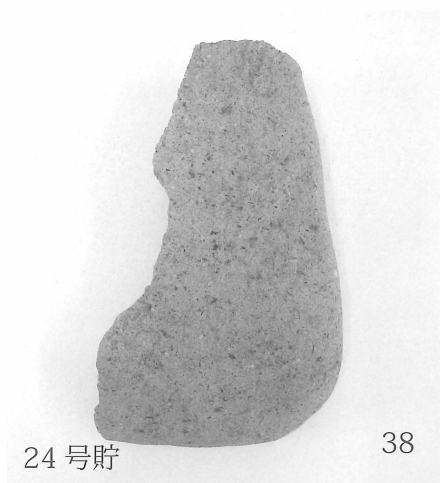
46 号貯

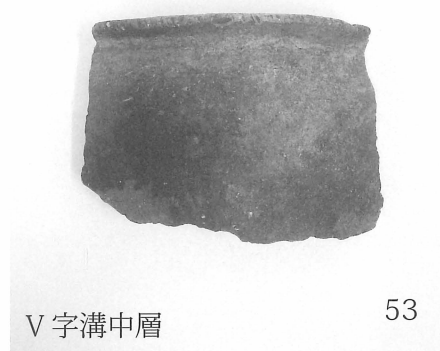
26



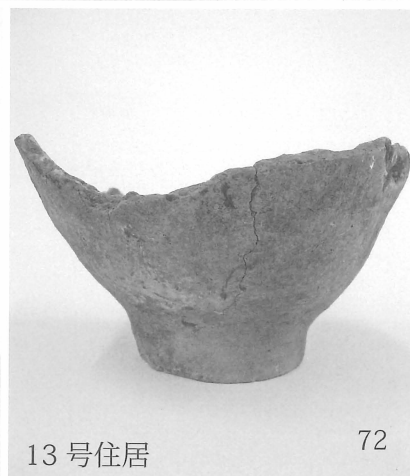
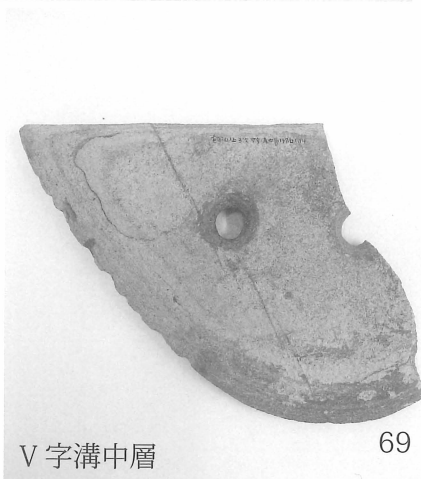
46 号貯

27





PL 9





14 号住居

73



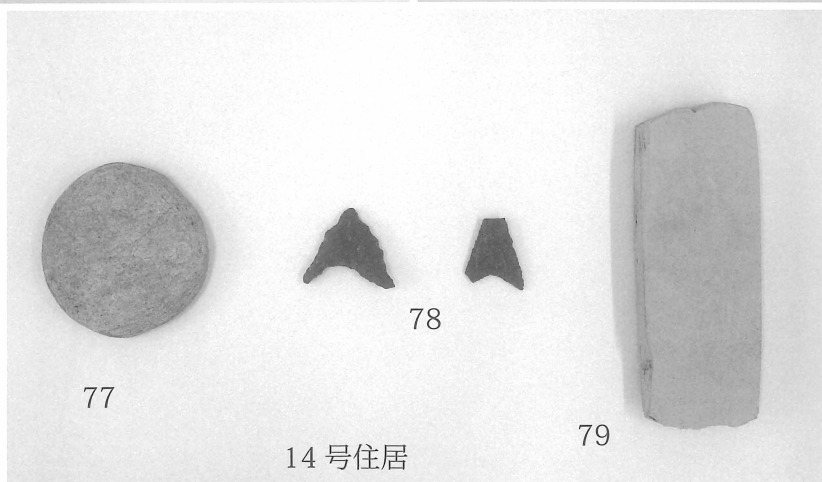
14 号住居

75



14 号住居

76

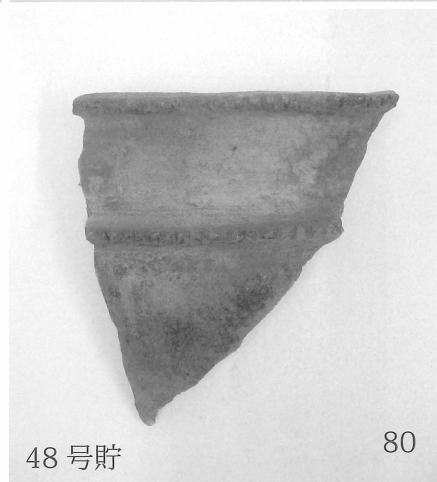


77

78

79

14 号住居



48 号貯

80



14 号住居

77



14 号住居

79



48 号貯

81



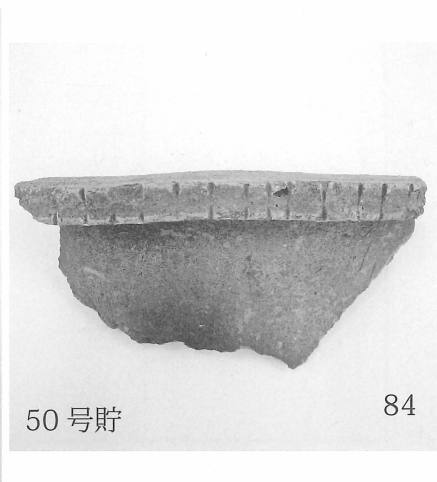
48 号貯

82



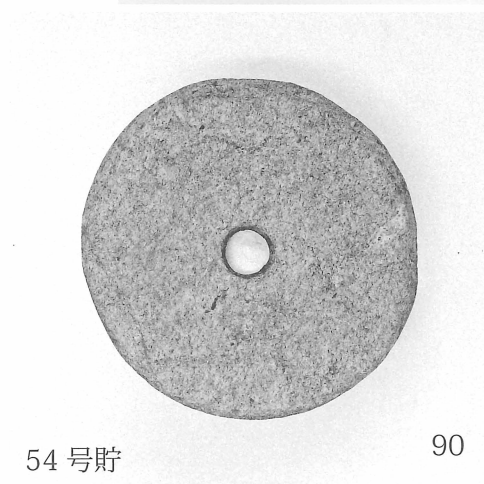
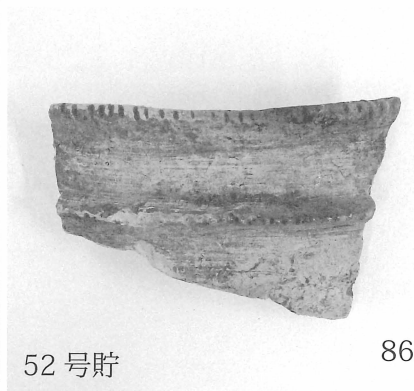
48 号貯

83



50 号貯

84



報 告 書 抄 録

ふ り が な		むろおか・やまのうえいせき						
書 名		室岡・山ノ上遺跡（２・３次調査）						
副 書 名		福岡県八女市室岡所在遺跡の調査報告書						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		八女市文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番号		第 92 集						
編 著 者 名		大 塚 恵 治						
編 集 機 関		八女市教育委員会						
所 在 地		834-8585 福岡県八女市本町647 TEL0943-23-1982						
発 行 年 月 日		西暦 2012年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 ° ' ''	東経 ° ' ''	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むろおかやまのうえ 室岡・山ノ上遺跡 （２・３次調査）	ふくおかけん 福岡県 や め し むろおか 八女市室岡 あざやま の うえ 字山ノ上	402109		33°21'56"	130°53'06"	1984 07 23 }	約 440 m ²	農地造成
						1984 08 31		
						1986 01 13 }	約 350 m ²	
						1986 01 25		
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
室岡・山ノ上遺跡 （２・３次調査）	集 落	弥生時代	竪穴式住居 貯蔵穴 環濠 溝状遺構 土壇 柱穴		弥生式土器 石器		弥生時代前期～中期 の集落跡と、これに 不随する環濠と貯蔵 穴群	

室岡・山ノ上遺跡

(2・3次調査)

第 92 集

平成24年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋 爪 印 刷
八女市吉田1899-1